
夜空

usa

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜空

【Nコード】

N3831X

【作者名】

usa

【あらすじ】

夜空の星のように、たくさんのお話を…。

恋愛多めの短編集です。

リクエスト受付中

ちらっと覗いてみてください。

作者より

こんにちは、 u s a です

この度、短編集を書くことにしました。

そこで、この小説の内容について、少しご説明を…。

皆様暫し、お付き合い願います。

まず、書くものは大体原作通りのカップリングの恋愛ものです。

（新蘭、平和、高佐、または快青）

時々恋愛じゃないものも書きますが、基本これです。

えゝ：リクエストも受け付けますが、原作カップリング以外のものはお控えください。

（コ哀、新哀、新志、B L、G L）

リクエスト受けてから、下書きなどもあるのでだいたい一週間から二週間ほどかかる恐れがあります。

ご了承ください。

気ままなカメ更新です。

日にちが空くかもしれませんが、催促などはおやめ下さい。

それでは、次話から本編スタートです。

どうぞ、ご覧下さい。――

はじまりのLove（前書き）

With02さまからのリクエスト。

組織壊滅一カ月後の設定。

新蘭

はじまりのLove

「いつてえ〜」

「自業自得よ。はい、終わり！」

赤く腫れた新一の頬に、蘭はやや乱暴に絆創膏を張る。

「いてっ」

「大体、しばらくの間は大人しくね、って哀ちゃんに言われてたじゃない！それで事件に行って怪我して…子供じゃないんだから、やめてよね！」

「ヘイヘイ、仰せのとおりですよ」

いじけた様に言う新一の頬を、蘭は引っ張った。

「少しは反省しなさい！」

「ひゃ、ひゃい・・・」

蘭は救急箱をしまうと、自分のカバンを持って帰る支度を始めた。

「それじゃあね。ジツとしててよ」

「あ、も、もう帰んのか？」

「…さよなら！」

蘭は勢いよくドアを閉めて去っていく。

新一はソファに座ると、ため息をついた。

そして、手の中にあつたものをテーブルに置くと、髪をかきむしつた。

「あゝ…クソッ」

ジャラッと音がしたそれは、片方だけの天使の羽根のようなものがついたネックレスだった。

「組織を倒して一カ月。せつかく元の身体に戻って彼女と再会できたけど、告白の返事も聞けないし、かといって自分から聞くのも恥ずかしいし、おまけにずいぶん前から買っていたそのネックレスも渡せない…ってところかしら？」

「うわっ!？」

突然考えていたことをいい当てられ、新一はソファからずり落ちる。

「は、灰原!」

「はい、これ今日の分」

オーバーリアクションの新一を前に、哀は無表情のままテーブルにトンと錠剤の入ったケースをおく。

「あ、ああ。ありがとな」

新一は座りなおすと、ネックレスをしまい、ケースを見つめた。

「また事件に行つてたそうじゃない？私の忠告も聞かずに」

「わ、わりいな」

「別に私は構わないわよ。あなたに自殺願望があるんならね」

新一は苦笑を浮かべた。

「いつまで飲みゃいーんだよ。この栄養剤」

「解毒剤を服用して一か月…あと一週間よ」

新一が栄養剤を恨めしそうに突いているのを見て、哀は言った。

「八つ当たりしないでくれる？あなたの恋愛事情と私の薬は全く関係ないわ。解毒剤の副作用が体力の低下だけですんだのもラッキーだし、むしろ感謝してほしいぐらいだわ」

「べ、別に八つ当たりなんかじゃねえよ」

それでもブスツとした顔の新一。

哀はため息をついた。

「そういえば、今彼女とすれ違った時…」

「あん？」

「新出先生の所に行くって言ってたわ。すぐくつれしそうにね」

「何っ!？」

新一が勢いよく立ちあがると、テーブルの上のケースもぐらつと揺れた。

「…無理をしない程度にね」

「おう！」

その言葉を聞いているのかどうかは定かではないが、新一は玄関に走り出すと、蘭に負けず劣らずの強い力でドアを閉めた。

「世話のやける人ね…」

哀はそう言っと、欠伸をしてソファに腰掛けた。

「蘭！」

とりあえず外に出て名前を呼ぶ。

まだそう遠くにはいっていないはず。

蘭の家の方を探してみるが、その姿は見えない。

仕方なく新出先生の所に行ってみようと方向を変えた。

だが、解毒剤の所為か、ひどく体がだるく疲れている。

それでも走ろうと足を動かした。

なんとか歩きだしたが、息が切れる。

これでは探しに行けそうにない、と思っていると…

「新一？」

今まさに探していた人物が目の前に。

だが一人ではない。

「大丈夫？汗びっしょりだよ」

「すぐにお家に行って手当てしないと」

と言って、新出が新一の額に手を伸ばす。

新一はその手を制すると、ゆっくり後ずさった。

「平気だ…。すぐ、帰っから、よ…」

一歩後ろに踏み出した瞬間、足がガクツと崩れた。

「39度6分…。無理しない程度に、って言ったはずよ？」
「すいませんねえ…」

体温計を見つめ、冷たい視線を向けてくる哀に、新一は投げやりな口調で言った。

すると、ドアをノックする音が聞こえた。

哀がどうぞ、と返事をする、と、蘭が入ってきた。

「し、失礼しまーす…」

反対に哀が出ていく。

「これ、お粥なんだけど…食べれる？」

新一が返事をしないと、蘭はベッドの傍にお粥をおいた。

「ちゃんと食べてね？」

「…オレのことはいいから、さっさと行けよ」
「は？」

蘭が間抜けな声を出すと、新一は布団にもぐりこんだ。

「新出先生の所…。会いに行ってたんだろ？」

「ああ…そのこと？」

「お前さ…早く言えよな」

「何を？」

新一は目だけを出して、蘭をジト目で見る。

「好きなんだろ？新出先生が…」

「…はい？」

「そ、それならそうと、オレにも言えつつの。知ってたらオレだつて…」

オレだつて…。

続けて言おうとしたが、その前に蘭の笑い声が聞こえた。

「バカじゃないの。アンタ」
「ハア!？」

いきなりバカと言われ、新一は跳ね起きた。

「確かに新出先生に会いに行っただけど…それはちょっと相談に乗ってもらっただけよ」

「相談？」

「そう。幼馴染の推理バカの調子がおかしいから、どうしたら元気になれるか、って」

それを聞くと、新一はガクツと肩の力を抜いた。

「えっ?どうしたの？」

「なんでもねえよ…。ちょっと自分が情けなくなっただけだ」

蘭はそつと新一に近寄ると、額に手を伸ばした。

だが、その手をグイッと掴まれ、新一に抱きしめられるような形になった。

「ちょ、ちょっと…」

「お前は、オレの傍にいろよ」

胸元で微かな音がして、蘭はそこを見た。

「わぁ…」

「そ、それもつとけ!」

新一は再びベッドに潜り込む。

「ありがとう、新一」

蘭はネックレスを見つめた。

「でも変な形ね…。何なの、これ？」

「…知るかよッ」

それがふたつに割れたハートであり、もう片方を新一が持っていることを蘭が知るのは、もう少し先のおはなし。

はじまりのLove（後書き）

次回は快青、かな

見て下さい

眠り姫（前書き）

快青。否、キ青？

恋愛要素、やや少なめ・・・。

眠り姫

「待てー！ツツキッドー！！」

（へへっ、ちよろいちよろい）

手中にある大きな紫色の宝石のついたネックレスを見て、黒羽快斗、否、怪盗キッドはほくそ笑む。

今日も屋上に行き、そこからダミーを飛ばして警官にまぎれて逃げる予定だった。

後ろから中森警部率いる警官が大勢いるが、キッドは余裕の笑みを浮かべて彼らを捲き、さっさと屋上につく。

月明かりに向かい、ビッグジュエルをかざしてみる。

結果は…

「シロ、か…」

仕方がないか、とため息をつき、宝石をしまおうとした。

だが…

「見つけたわよ、怪盗キッドー！」

突如大声がして振り返る。

（ゲッ）

「さあ、今日こそはお父さんの前に、あなたを引きずり出してやるんだから！」

手錠を持ち、闘志に燃える幼馴染の姿に、さすがのキッドも顔をひきつらせる。

「い、いけませんよ、お嬢さん。そのような物騒なものをお持ちになつては…」

辛うじてそう言ったが、青子は構わずじりじりと距離を縮めてくる。

「なんとでもおっしやい！早くこつちに…」

不意に青子がキッドの腕を掴んだ。

ガチャンと音がし、見事手錠がキッドの手首に。

「やったあゝ！」

無邪気に喜ぶ青子だが、キッドは心の中で謝った。

（ゴメンな、青子）

「私もお嬢さんとおしゃべりすることができるのは誠に光栄ですが・・・そろそろお子様は眠るお時間ですよ」

「な・・・っ。あ、青子、お子様じゃないもん！」

挑発に乗り、振り返る青子に、キッドは催眠スプレーをかけた。

「おっと」

青子が倒れる前に、キッドは青子を支え、そっと地面に横たわらせた。

そしてその首に盗んだ宝石をかけた。

「じゃな、青子」

「キッドーーーーっ!!!」

バアン!という派手な音とともに、中森警部のお出まし。

「おや、遅かったですね、中森警部」

「何イ!？」

「あなたの眠り姫が、ここでお待ちだというのに…」

さりげなく青子に目をやると、中森警部の顔色が変わった。

「あ、青子!？」

「シーツ。姫が起きてしまいますよ」

キッドは人差し指を唇にあてた。

「さて、姫が目覚める前に、私は退散するとしましょう」

突然あたりが眩しく光り、周りから警官の焦った声が聞こえてきた。

やがて視界が開けると、やはりそこにはすでにキッドの姿はなく…。

「に、逃がすな!追えーっ!」

中森警部の合図とともに、大勢の警官が走り出す。

その中にはもちろん、キッドが変装した偽警官も混じっているわけ…。

今日も怪盗キッドは見事に逃げたのだとき。

翌日、青子にキッドのことを散々悪く言われたことは、言うまでもない…。

「青子、お子様じゃないもん！」

はいはい…。

眠り姫（後書き）

一応リクエスト作です。

こんなんでよろしかったんでしょっか・・・？

次回は平和

ポニーテール（前書き）

幼少期の平和。

作者の妄想満載（笑）

ポニーテール

「ねえ、和葉ちゃんって、どうしてもいつもポニーテールなの？」

久しぶりに会う東京の友人にたずねられ、和葉は戸惑う。

「ど、どうして、って言われても……」

「確かに、それだけ長ければ色々ヘアアレンジできるのに、いつもポニーテールにリボンだよね？」

蘭の問いに便乗し、園子も言った。

「べ、別に深い意味はあらへんよ」

「あつ。その顔は服部君絡みね！」

「どーせ、“和葉はその馬の尻尾が一番似合うんや”とか言われたんでしょ？」

「そ、そんなんちゃうよッ」

和葉が即否定すると、2人はニヤツと笑った。

「ふうん。それならどんな理由なの？」

「え、えと……」

「いいじゃない。教えてよ！」

園子がメモを取り出しかねない勢いで迫る。

蘭も隣で興味心身な表情。

「あ…あれは…」

和葉は思い出していた。

あの幼いころの、甘酸っぱい一時を。

「かずはあゝ。こつちやこつち！」
「へいじ、まってや！」

あれはそう。

2人がまだ三歳ぐらいの時。

いつものように公園を走り回っていた。

まだ下ろしていた和葉の長い髪が風になびき…平次の顔に当たった。

「うわっ。おまえのかみ、ジャマや」
「そ、そんなんいつても…」
「ジャマにならんようおさえとけ！」
「あっ。へいじ〜」

さっさと走り出す平次を、和葉は髪の毛を抑えつつ追いかける。

「おそいでかずは」
「へいじがはやいんよ！」

それを聞くと、平次は少しスピードを緩めた。

やがて和葉が追い付くと、平次は木を指差した。

「みてみ、かずは。あのき、うえのほうになにかひっかかってんで」「えっ？なにになに？」

和葉は背伸びをし、平次が差すものを見ようとした。

「ちよつとのぼってとってきよか」

「や、やめたほうがええんとちゃう？」

「なんでや？」

平次はキョトンとした目で和葉を見返すと、スルスルと木を上っていく。

「へ、へいじい！」

慌てて追いかけようとしたが、頭の方に鈍い痛みを感じた。

「いたっ・・・」

思わず声をあげ、その方を見た。

毛先が近くにあった別の木の枝に引っかかっている。

「どないした？」

上の方から平次の声が振ってくる。

「か、かみがひっかかってもうた…」
「ハア!？」

平次は急いで降りてくると、和葉の髪を引っ張った。

「い、いたいわっ」
「しゃ、しゃーないやん」
「もうこんなかみ、きつたる!」

和葉がそう言っ、自分の髪を掴んだ。

だが、

「アカン!」

平次が突然大声を出し、和葉の手を止める。

「へいじ…?」
「お、おまえはアホやから、かみぐらいはだいじにせんと、なんもなくなつてまうやる。じつとしとけ!」

平次はぶっきらぼうに言うと、和葉の髪を丁寧に木から離そうとした。

「ほら!とれたで!」
「よ、よかつたわ…」

和葉がホッとしたような表情をすると、平次はゴソゴソとポケットから何かを取り出した。

「これ、いまきにひっかかったやつやけど…」

後ろを向くように言い、平次は和葉の髪に何かをしはじめた。

「なんなん、これ？」

「これでオツケーヤ！」

平次は満足げに言うと、ニカツと笑った。

「これならかみ、ジャマにならへんやろ？」

「えっ？わぁ…」

和葉はリボンでポニーテールに結わえられた髪に触れ、嬉しそうに笑う。

「おおきにな、平次！」

この日から、リボンとポニーテールは和葉のトレードマーク。

「和葉ちゃん」

「へ？」

名前を呼ばれ、たった今浸っていた思い出の世界から戻ってくる。

「今何考えてたのよ？」

園子がニヤツとして和葉を小突く。

「な、何でもあらへん」

「またまたあ。照れちゃって」

蘭も和葉の頬をつつく。

「さあ、何考えてたか、吐きなさい！」

「いーやーやー！」

因みに、平次がくれたリボンは、今でも和葉のお守りの中に…。

ポニーテール（後書き）

以上、u s aの妄想でした（＃＾・＾＃）

本当に平次君がこんな事をするかとか、偶然木にリボンがひっかかるかと思っただ方もいらっしゃるかと思いますが、どうか、ご勘弁を
> (_ _) <

次は何かな～。

勇者？（前書き）

オリキャラ登場。

新蘭

勇者？

「オレと付き合ってください！」

「ごめんなさい」

告白してからおよそ0・5秒で振られる男子生徒。

でももう慣れた。

何せ、これが87回目の告白。

だがここまで来てもめげないとは、この生徒はある意味勇者かもしれない。

目の前にいる彼女は、さすがに迷惑そうな顔をしている。

「須藤君、知ってると思うけど、私……」

「工藤のことなら確かに知ってる。でも、オレが毛利に告るのはいいだろ？」

男子生徒、須藤光輝すどうみつひは懲おこりる様子もなく笑っている。

「でも、私は須藤君とは付き合えないよ」

彼女、毛利蘭はそう言って部活に戻る。

「またダメか……」

一人になると、光輝はため息をついた。

三か月ほど前に転校してきた彼が、こうして毎日蘭に告白をしているのには、ある理由があった。

「ちきしょ・・・っ」

ここは空手関東大会会場。

光輝はそこで座りこんでいた。

「今ので勝てれば決勝だったのに…」

彼は先程、準決勝に敗れたばかりだった。

その前の試合で右膝に怪我を負ったことが直接の原因だった。

「次こそは…」

と言って、光輝は立ち上がろうとしたが、傷が痛み、またうずくま
った。

「つてえ」

「あの…大丈夫ですか？」

突然上から声がして、光輝は顔を上げる。

「傷、冷やした方がいいですよ」

そう言って蘭は、光輝に保冷剤を差し出した。

そしてこの瞬間、光輝は命を助けてくれた人魚姫の歌声に心を奪わ
れる王子の如く、保冷剤を差し出す空手の凄腕の少女に恋をしたの
だ。

「ちえつ。いつも工藤工藤って…」

光輝はぶつくさ言いながら帰路についていた。

「あの推理やるーのどこが…」

言いかけて光輝は口を開いたまま立ち止った。

そりゃ、好きな女の子の恋人が別の女性と歩いていたら、そうなるのも無理はない。

「あのやろオ」

声をかけてムードを台無しにしてやろうかと思ったが、光輝はこらえて2人の姿を写真に収めた。

「…これで毛利はもらっただぜ」

「毛利」

「ごめんなさい」

「な…っ。お、オレ、まだなんも言ってねーんだけど…」

何も言わないまま振られ、さすがの光輝もしよげる。

「昨日も言っただと思うけど…」

「工藤だろ？ま、これを見てから考えてよ」

そう言うと、光輝は昨日の写真を蘭に見せた。

一瞬、蘭は大きく目を見開き、固まった。

「アイツ、最低だよな。毛利みたいな美人の彼女がいるくせに、他の女と…」

「さよなら」

「えっ？」

蘭はそのまま教室に向かおうとする。

「ちょ、ちょっと、毛利？」

「どうもありがと、須藤君」

嫌な予感がした。

そして、その予感は当たった。

数分後、帝丹高校にだけ、強大な雷が落ちてきた。

「ふぁ・・・」

欠伸をしながら歩き続ける。

あのと、様々な生徒が見守る中、蘭と新一の大喧嘩が始まった。最終的に、蘭の大っキライ！という声で終わったが、そのあと二人はどうなったのやら…。

ことの元凶を作ったのは自分だけに、多少は気になる。

だが、ちらつと覗いた喫茶店で、その考えは一気に吹き飛ぶ。

「アイツ…」

新一と一緒にいたのは、昨日と同じ女性だった。

顔は見えないが、肩を震わせているため泣いているのがわかる。

それを新一が笑顔で慰め、手を握っている…というような感じた。

やがて2人が店から出てきたため、光輝は咄嗟に隠れた。

「大丈夫ですよ」

「で、でも…」

「僕がついてますから」

口ぶりから察するに、女性の方が年上のよう。

「ゴメンね、私のために…」

「いや、気にしないでください」

新一は他に何か言おうとしたが、その前に誰かが来た。

「…どうも」

お互いに堅い表情で頭を下げる。

相手の男は女性に目を向ける。

「こんな探偵を雇って…オレのことを調べさせたのか？」

…は？

探偵？

雇った？

「あ、あなたが別の女と会っているのは、薄々気づいてました。だから、彼にお願いして…」
と、女性が小さな声で言った。

話を聞いているうちに、何となく理解ができてきた。

これはただの浮気調査かなんかで、女性は雇い主だったのだ。

「いいわけはあとでいい。帰るぞ」

「い…いや、です」

「とにかく、オレと一緒に帰るんだ!」

男は女性の手を掴もうとしたが、寸前で止められた。

「嫌がつてるじゃないですか。やめてください!」

「も…毛利?」

蘭はジッと男を見つめていた。

「お、お前…」

新一も突然現れた蘭を見て、口をパクパクとさせている。

「なんだ、お前は?」

「ただの通りすがりの通行人です」

嘘だ、と光輝は思った。

蘭は偶然来たんじゃない。

新一をつけてきたのだ。

さつき大嫌いだと言った男を。

「関係ないだろ」

「…いい加減にしないと」

あ、ヤバい、と思った時にはもう遅く、男は蘭に蹴っ飛ばされていた。

「なっ、何すんだよッ」

男は叫ぶと、蘭に蹴られたらしい頭を押さえた。

当の蘭は涼しい顔。

男はそれを見てカッとしたらしく、いきなりこちらに向かって走ってきた。

「えっ？」

咄嗟のことで蘭はよけずにいると、腕に熱さを感じた。

「いつ・・・」

そこを見ると、何かで引っ掻いたような傷ができている。

女性が悲鳴を上げた。

男はカッターナイフを手に、息を荒げていた。

「女のくせに、男をこけにしゃがって・・・」

そう言うと、もう一度カッターを蘭に向ける。

危ない。

そう思った光輝の身体は自然と前へ動く。

「うあああッッ！」

「な、なんだ？」

そのまま格好良く相手に体当たりし、カッターを奪って彼女を助けるか…と思いきや、その手前にあった石ですってんころりん。

なんと情けない勇者だ。

だがこのおかげで男に隙ができ、新一は無事に男をとらえた。

そして蘭はというと、笑顔になってまっすぐ光輝を……通り越し、愛しき恋人の胸に飛び込んだ。

「新一っ」

「蘭」

「ごめん。さっきは、その……」

「もういい」

新一も蘭を抱き締める。

「でも、疑ってたわけじゃないからね？ただ、ホントかどうかを確かめに……」

「わあってるって」

必死で弁解しようとする蘭を、新一は優しくなでる。

「ケガ、大丈夫か？」

「うん…」

「手当てするぞ」

新一は蘭をおぶり、帰ろうとした。

「あ、あのさ」

その後ろ姿に、光輝は遠慮がちに声をかける。

「…なんだよ？」

あ、知ってる。

コイツオレが毛利に言い寄ってたこと絶対知ってる。

光輝はひきつった笑みを浮かべつつ、口を開く。

「い、いやあ、まさかこんなことになるとはなあ…。でもまあ、毛利が無事で良かったよ」

「お前が蘭に妙な写真を見せなければ、ケガなんてなかったけどな」

新一がぶっきらぼうに言うと、光輝も渴いた笑い声を出す。

「そ、それは悪かったよ。じゃ、じゃあ、オレ帰るわ」

「待った」

慌てて帰ろうとする光輝を新一は呼びとめる。

「な…何？」

「先に行つとく。オレ、蘭と別れる気ねえから」

そう言って踵を返す新一。

それを見て、光輝はポツリと漏らす。

「…惚れたぜ」

「えっ？」

「だから蘭は…」

新一が振り返り、面倒臭そうに言おうとしたが、光輝はキラキラと目を輝かせた。

「自分の女を強く思うそのハート・・・男として惚れたぜ、工藤！」
「ハア!？」

「工藤！オレを弟子にしてくれ！」
「何でそうなんだよ！」

…勇者は何事も諦めを知らない。

勇者？（後書き）

意味不明ですみません（汗）

とりあえずオリキャラを出したかったので…。

長々と失礼しました＞（――）＜

ブレスレット

「ハア……」

彼はため息をついていた。

理由は前を歩いている幼なじみの少女。
ポニーテールを揺らしながら、無邪気に笑っている。

その愛らしい表情に目を奪われつつも、またため息をつく。

「なあ平次。これ可愛ええな！」

「えっ？あ、あゝ」

（可愛ええ…かもな）

ブレスレットをうつとりと見つめる和葉。

そしてそんな和葉を見つめる平次。

「でも高いわあ。あたしのお小遣いじゃ無理やん」

値札を確認し、和葉は残念そうに言うと、ブレスレットを元の位置に戻す。

「なんや、ええんか？」

平次が尋ねると、和葉も名残惜しそうにもう一度ブレスレットを見る。

「だってしゃーないやん。」

これ買ってもうたら、今からお好み焼き食べれなくなってまっし」
「そら昨日けつたいなストラップ買ったしなあ」

平次が言つと、和葉はムツとして言い返す。

「どこがけつたいやの！？ええやん別に」

子供のようにムスツとする和葉を見て、平次は思わず笑った。

「何が可笑しいの！？」

「お前のアホ面がや」

「なんやて！」

ムキになる和葉が可愛らしくて、平次はまた笑う。

「もうええわ！平次なんか知らん！」

終いに和葉はそう言つて平次から顔を背けた。

「ガキやあるまいし、すねんなや」

だが和葉は仏頂面のまま。

そして何も言わずに雑貨屋を出た。

「お、おい、和葉！？」

平次も慌てて後を追おうとしたが、立ち止まって今和葉が見ていた
プレスレットに目を向けた。

「あのブレスレット、欲しかったわあ……」

和葉はブツブツと言いながら、つま先で小石を蹴る。

「でも千六百円やし……。でも可愛ええし……」

「欲しいんやったら欲しいって素直に言えや」

ジャラつと音がして、和葉は振り向いた。

「ほれ」

「へ、平次……」

驚く和葉に、平次は無言でブレスレットを差し出す。

「え、ええの？」

「いらんのなら返品してくんで」

「あつ。も、貰う！」

和葉は平次からブレスレットを受け取ると、嬉しそうに手首に付けた。

「おおきに、平次！」

「あ、ああ……」

「お金いつか払うな！」

「そんなんええわ」

和葉が不思議そうな顔をした。

「ええの？」

「今日は特別やで」

ぶっきらぼうな言い方とは逆に、少しだけ緩んだ表情。

「何ニヤけてんの？」

「に、ニヤけてなんかないわ！」

「なんか平次可笑しいで？」

「気のせいや」

そう言つと、平次は先に歩き出した。

「ま、待ってえな！」

和葉も急いで追いかける。

この時、平次の耳が赤く染まっているのがチラッとだけ見えたそう
な。

プレスレット（後書き）

智呂様リクエスト。

平和

甘さやや控えめ？

キスまでの距離（前書き）

新蘭

付き合い始めて一カ月設定

キスまでの距離

「ハア…」

「ねえ」

「ハア…」

「ちょっと!」

「ハア…」

「…聞いているの!？」

耳元で叫ばれ、新一は我に返る。

「うわっ」

「何よ、ため息ばかりついてると思ったら人の顔見て驚いちゃって…。そんなに私といたくないわけ？」

蘭は面白くなさそうに頬を膨らませている。

「い、いや、ちょっと考え事を…」

「どうせ事件でしょ？恋人との時間よりも事件が大事な冷たい探偵さん!」

「ま、まだ怒ってんのか、この間の土曜の…」

ツンと顔をそむけている蘭を見て、新一は言った。

「べっつにイ」

蘭は素っ気ない。

これならわざわざデートをすっぱかしてまで事件に行くんじゃないかと、今更ながら後悔。

とはいえ、彼はこの事で悩んでいたわけではない。

2人が交際を始めて早一ヶ月。

だが相変わらず奥手な二人は、未だ手ぐらいしか握ったことがなく…。

それは幼馴染の頃もやっていたわけで、唯一恋人らしいことといえば、休日に出かけることが多くなった程度。

おまけに毎度毎度事件が起こり、愛しき名探偵はそちらへ…。

最初は笑って送り出してくれていた蘭も、次第に冷たくなり、現在に至る。

「ら、蘭」

「…何よ？」

蘭の態度に、一瞬新一もたじろぐ。

「そ、その、悪かったって…」

「……………」

「埋め合わせに、前に蘭が観たいって言ってた映画、行こうぜ」

それを聞くと、蘭も少しだけ表情を和らげる。

「全部新一のおごりね？」

「えっ？…は、はい…」

だが名探偵に休日はない。

映画館に辿り着く前に、強盗、引ったくりなどの事件が起きたがため、せつかく元に戻った蘭の機嫌も再び陰悪に。

ようやく映画館に着くと、チケットに飲み物、ポップコーン、パンフレット、さらにはストラップやら下敷きやらファイルやらも買われ、やっと劇場内に入る。

それらの荷物を持たされたまま席に座ると、すでに映画は始まっていた。

蘭がチラッと非難の眼差しを向ける。

だがこんな所で言い争うわけにもいかず、静かに椅子に座り、観賞を始める。

観賞開始15分後、すでに新一は欠伸を繰り返していた。

そりゃ、少女漫画をベースにしたラブロマンスを、男子高生が楽しそくに観るのは無理もあるのだが。

けれどもこれも蘭のため、と必死で目をあけている。

それでも睡魔に襲われて、ついにガクツと首を垂れた。

すると、急に肩の方が重くなり、気になってそちらに目を向けた。

見れば、蘭が新一の肩に頭を乗せ寝息を立てている。

疲れさせちまったか…と呟いて、新一は蘭の髪を撫でた。

蘭は少しうなつたが、起きる様子はない。

そのあどけない寝顔を見ているうちに、この間の考え事を思い出す。

さてどうしよう。

蘭なら寝ている。

皆映画の方に夢中で、こちらに注意を向ける者もない。

今なら別に大丈夫だが…。

それでいいのだろうか？

目を覚まして、そのことを蘭が覚えていなかったらショックだし…。

理性と欲の間で葛藤をしつつも、新一は蘭を見つめていた。

そして、つい顔を少しだけ近付ける。

もうここまできると、理性も何もなくなってしまうのが、男。

蘭の寝息がかかるほど近くまで顔をよせた。

仕方ない…と、目をつぶろうとした、その時。

「ふぁ…」

珍しく蘭が自ら目を覚ました。

「…何してんの？」

「いや…別に」

2人のキスまでの距離は、まだまだ遠いよう。

新一の苦悩は続く。

キスまでの距離（後書き）

もしかしたら、続きができるかもしれません。

次回は哀ちゃんメイン！

あ、恋愛じゃありません（汗）

リクエストもよろしくです

イルカ（前書き）

今回は哀ちゃんメインです

恋愛じゃありません（＾－＾；）

蘭ちゃんのあの名言が出てきたあの事件の時です。

イルカ

可愛くて、賢くて、皆の人気者。

そう。

彼女はまるでイルカ。

それに比べたら私は…

誰からも好かれず、蔑まれている海の嫌われ者の鯨…。

私と彼女は大違い。

ご両親がいて、

親しい友人がたくさんいて、

好きな人がいて、

その人からも思われていて…。

皆彼女を好きにならずにはいられない。

何故…どうして…

彼女は私のような黒い過去を持つ人に、優しくしてくれるの…？

どんなに冷たい態度をとっても、あなたは私に笑顔を向ける。

その度に私の心は浄化されていく。

組織で毒薬を作り、たった一人の姉も殺され、裏切り者として怯える日々…。

そんな生活の中では、彼女は眩しすぎる。

彼女といると、私が辛くなってくる。

聖水を浴びせられた悪魔のように、

苦しくて、落ち着かない…。

でも…逃げたくない。

“ 勇気という言葉は、身を奮い立たせる正義の言葉 ” …ね。

彼女らしいわ。

私も…勇気を出すべきよね…？

「私の名前は灰原哀…よろしくね」

イルカ（後書き）

わかりにくいと思った方々、すみませんでしたm（| |）m
次回はオリキャラ出る予定です（^ | ^）v

恋愛小説（前書き）

オリキャラ登場！

恋愛小説

「リサ…」

「シンくん…」

頭の中で2つの声が響く。

ああ、今とっても素敵なストーリーが…。

「新——！」

バチン！！

私の脳内でフワフワと漂っていたものが盛大な音をたてて一気に消えた。

「はい、タオル」

「おっ、サンキュー」

だぁ——っつつつ！！！！

今いいところだったのに！

なんなのよ、あの女！

せつかくいストーリーが浮かびそうだったのに…。

思わず私が机に突っ伏していると、携帯が鳴った。

“先生へ、今日中にお願いしますね！”

メールにはそれだけ書かれている。

私は深いため息をついた。

高校生にして私が先生と呼ばれているのにはわけがある。

私の正体は、何を隠そう今大人気の新人小説家、さいとうありさ 斎藤有紗！

実は最近のスランプなんだけどね。

私の専門は恋愛で、大体は自分の想像をそのまま書いている。

えっ？相手は誰かって？

そーんなの決まってるじゃない！

私の心の彼は、あの名探偵、工藤新一！

いつも彼との恋を想像しながら小説を書いているの。

そう。

あの女が出てくる前は…。

私がいうあの女とは、正真正銘工藤君の彼女、毛利蘭のこと。

可愛らしくて、女の子っぽくて、優しくて、友達思いで、強くて、可愛いくせにカッコ良くて…。

なーんか、ムカつくぐらい完璧な子。

何もかもパーフェクトな工藤君とは本当にお似合いで、今は絶賛失恋中…。

おかげで仕事は進まないし、担当編集者に怒られるし、成績下がるし、寝不足になる…ふぁゝあ。

「おはよう、莉紗子ちゃん（私の本名）」

…来た。

「はよ」

わざと素っ気なく言うけど、毛利蘭はニコニコ笑っている。

「眠そうだね。大丈夫？」

「別に…」

こんな態度をとっているけど、私は決して彼女が嫌いなわけじゃない。

普通に優しいし、いいヤツだから、憎みたくても憎めない。

現に私は、毛利蘭だからこそ、工藤君を諦めたようなもの。どうせかないっこないし。

いいんだ、
これで。

私は帰り道、工藤君と毛利蘭を見かけた。

…会話、なさすぎだろ。

そう思っちゃう程、2人は静かだった。

多分、原因はさっきの言い争いだ。

よくわかんないけど、急に毛利蘭が怒鳴りだして、工藤君とケンカしはじめた。

園子が言うには、工藤君がずっと事件の話をしていることに腹を立てたらしい。

工藤君は何度も毛利蘭に向かって口を開きかけていたけど、毛利蘭はツンとして無視している。

でもやっぱり気になるみたいで目を工藤君に向け、目が合うとすぐに逸らし、そしてまた…

って、なんだよこの超ベタな恋愛小説みたいな展開は！

私が一人突っ込んでいると、ようやく工藤君が言った。

「あ、あの…さ」

「…何よ」

毛利蘭の態度は冷たい。

「その…悪かったよ」

「……………」

「まあ、お前が気にいらねえのはわかるよ。いつてもオレ、事件ばっかだし。寂しい思いさせてんのに…事件の話とかしちまってよ…」

「…別に事件に行くことはいいの」

毛利蘭は前を見たまま言った。

「ただ、怖いだけ。新一がまたいなくなっちゃったら…って」

「蘭…」

工藤君が毛利蘭を抱き締めているのが見えた。

ああ…今、いいストーリーが浮かんだ…。

その時、また携帯が鳴った。

『先生！今日こそは書いてもらいますよ！もう何も浮かばないとかは…』

「大丈夫です。書けます」

『えっ？』

斎藤有紗、人生初のミステリーに挑戦！

もちろん、主人公の探偵と幼なじみの恋人とのラブロマンスもたっぷりいれてね！

恋愛小説（後書き）

次回はキスまでの距離、
続編！？

キヌまでの距離 その2（前書き）

キヌまでの距離、続編です

キスまでの距離 その2

「ここはこうだろ」

「えっ？ な、なんで？」

「だからこの×が…」

蘭からノートを取り、新一はいとも簡単に数学の問題を解く。

「ほらよ」

「あ…ホントだ」

どんな問題もスラスラ解いてしまふ名探偵に、蘭はため息をついた。

「いいわよねえ。誰かさんは。なーんにもしなくても、テストなんか余裕だもんねえ」

「バ一口。オレだって多少の努力はしてんだよ」

「はいはい、多少ね、た・しょ・う！」

再びノートに向かうものの、あまり集中できない。

（顔…近い）

新一が前方から蘭の手元を覗き込んでいるため、2人の距離はかなり近い。

（そういえば…）

すっかり勉強から頭が逸れ、この間のデートのことを思いだす。

あの時新一は、眠っていた自分の目の前で何やら思いつめたような表情をしていた。

（なんだっ たんだろ…）

「おい、蘭！」

「へっ？」

名前を呼ばれ、慌てて顔を上げた。

その瞬間、お互いの顔がすぐ真正面にあって、蘭は思わず目を伏せた。

だが、新一は逆に蘭の顔を上げる。

「ち…ちよつと…」

「何寝てんだよ。お前が数学教えるって言ったんじゃねえか」

それを聞くと、蘭はガクツと肩の力を抜いた。

「？どうかしたのか？」

「な、なんでもない…」

自分が考えていたことが恥ずかしくなってきた。

「あつ、き、キッチン借りるね」

いづらくなり、蘭は立ち上がるとキッチンでコーヒーを淹に行った。

「ハア…ダメダメ！集中しなくちゃ！テストまで日にちがないんだから」

自分に必死で言い聞かせ、頬を叩く。

「よし！」

気合いをいれ、マグカップを持って部屋に戻る。

「お待たせ」

だが返事はなく、不安になって見てみると、新一は机に突っ伏していた。

「新一…寝てるの？」

試しに頬を突つついてみるが、起きる気配はない。

「何よ。私には寝るなって言ったのに」

憎まれ口を叩きながらも、綺麗な横顔にしばし見とれる。

「男の子のくせに、綺麗な顔…」

愛しさが込み上げ、頭をそつとなでる。

「…今日はありがとう」

小声で囁くと、新一の頬に軽く唇を当てる。

一瞬、新一が動いたような気がして、蘭は慌てて離れた。

けれど、新一は起きることなく目をつぶったまま。

ホッと胸を撫で下ろし、また新一の寝顔を見つめた。

2人のキスまでの距離は、少しでも縮まった…かもしれない。

実はこの時、新一が起きていたことは、彼だけの秘密…。

キスまでの距離 その2（後書き）

実はめちゃくちゃ照れてた新一君（笑）

リクエストまだ受け付け中です

よろしくお願いしますm（ ）m

占いの館 蘭&コナン（前書き）

何故かフツと浮かんだもの。

蘭ちゃんとコナン君を占ってみたら、どんな結果に？

占いの館 蘭&コナン

とある小さな占いの館にて…

わしは過去と未来を読み取る者。

この館には、様々な悩みを持つ人間が訪ねてくる。

その内、今日は2人紹介してみよう。

カランカラン

「誰じゃ？」

「も、毛利蘭といいます……」

ふむ。花のランとな。

なかなか良い名じゃ。

「知り合いから、ここの占いがよく当たって聞いてきたんですけど……」

「座りなされ」

この娘ぐらいの者は、大抵同じ悩みを抱えておる。

おそらく、この娘も……。

「何の悩みかね？」

「え、えっと……幼なじみのことなんですけど……」

「幼なじみ？」

はて、めずらしい。

「そいつ、今用事があって、どっかに行っちゃったんですけど、時々しか帰って来なくて、それで……」

なんじゃ。

結局そんなことか。

「その者が今どこにいて、おぬしをどう思っているか…かの？」
「は、はい！」

恋愛に関しては苦手なのじゃが…仕方あるまい。

「…すぐ近くじゃ」
「えっ？」
「その者はおぬしのすぐ近くにおる。おぬしも、少しは気付いておるのではないか？」
「は、はあ…」

来るぞ。

わしが最も嫌いなあの質問がの。

「あ、あの！その人は、私のこと…ど、どう思っているとかは…」

…やはりな。

「そんなこと、わしが知るわけなかるう。自分で聞きなされ」
「で、ですよね…」
「わしが言うことはもう何もない。さあ、行きなさい」

皆恋愛となると、同じ質問をぶつけてくる。

じゃが、人の心はわしの口から聞くべきではない。

本人から直接聞くものじゃ。

カラカラン

ほお、子供…。

しかも男とはめずらしいの。

「…おぬし、何かとんでもない秘密を抱えておるな」
「そう見える？」

まあ、良かろう。

「おぬし、名は？」
「江戸川コナン」

面白い名じゃ。

じゃが嫌いではないぞ。

「…おぬしが探して求めているものは、次期見つかるじやろう。その飯の姿からも、戻れる」

「ふう…ん。そっか」

なかなか尻尾を出さんな。

「おぬしは少し自由奔放な所があるの。そのせいで大切なものを失いかけたことも。できるだけ早く、その者の近くに行きなされ。むやみに色々なことに首を突っ込みすぎて、抜けられんようじゃから、まずその性格を直すことじゃ。少し素直になることも学びなされ」

本当はもつとあるのじゃが…言つとるときりがないのう。

「そう。ありがと、おばあさん」

「それともうひとつ。その大切なもの、早くせんと他の誰かに奪われてしまうぞ」

うむ、この表情…。

やはり子供離れしておる。

なかなか面白い青年じゃったのう。

占いの館 蘭&コナン（後書き）

その内別の人の占い結果を書いてみたいですね

キスまでの距離 その3（前書き）

キスまでの距離、更に続編。

鈴木財閥のパーティーにて

キスまでの距離 その3

「ねえ、本当に私達も来て良かったの？」

著名人やセレブに囲まれ、蘭は戸惑ったように尋ねる。

「なーに言ってるのよ！あんたと新一君は、立派なうちの招待客だもん。堂々としてな、って」

園子はそう言って笑った。

「で、旦那は？」

「だ、旦那じゃないわよ！」

慌てて否定するも、そういえばと辺りを見回した。

「あ、もしかして、あれじゃない？」

園子が指差す方を見ると、人だかりができている。

女性ばかりで、時折甲高い声で「サイン下さい」だの「握手して下さい」だのと叫んでいるのが聞こえてくる。

「有名人でしょ」

と、蘭は言ったが、園子は頑として

「いーえ。あれは新一君ね！この推理クイーン園子様の目に狂いはないわ」

と言い張る。

苦笑しながらも、そこまで言われると気になる。

蘭も目を凝らして女性の中心を見つめた。

やがて、満足した女性達が散っていき、真ん中にいた人物の顔が見えてきた。

「あ…」

そこには愛しき名探偵の姿。

大勢のファン、それも女性に囲まれ、頬が緩んでいる。

「あやつ、蘭という妻がいながら…」

「妻じゃないわよ!」

ものすごい剣幕で怒鳴られ、園子もビクツとした。

「そ、そんなに怒んなくても…」

そつと言ったが、蘭は聞いていない。

怒りに手をワナワナと震わせている。

園子もなだめるのは諦め、新一が素直に謝るのを祈った。

やがてファンが全員いなくなり、新一がこちらに戻ってきた。

「わリーわリー。囲まれちつてよ」

そう言いながらも、まんざらでもない表情。

鼻歌でも歌い出しそうだ。

「相変わらずモテモテですこと」

と、園子が皮肉っぽく言うが、新一は笑顔のまま。

なんだか気味が悪い。

「飲み物取りに行つてたんでしょ…？」

「え？あ、ああ…」

いつになく低い声の蘭に、新一も一瞬たじろぐ。

「ふう…ん。そう。それだけでねえ…」

「ら、蘭。何か怒つてんのか？」

パリン！と音がして、蘭が持っていたグラスが粉々に砕け散った。

「ら…蘭」

園子も顔を引きつらせた。

「だ、大丈夫かよ！」

新一は慌てて蘭の手を取り傷がないかどうか調べた。

「怪我はねえな…」

「もう！しょうがないわねえ。あたし、新しい飲み物取りに行ってくるから」

だが、園子が行くまでもなかった。

いきなり蘭はテーブルに置いてあった新一のグラスを取った。

そして、半分程残っていた中身を全て飲んでしまった。

「「あ……」」

新一と園子の頭に同時に同じ言葉が浮かぶ。

“間接キス”

だがそのままロマンティックなムードに入れるわけもなく…。

バシッ！

「いつてえ！」

「さよなら！」

2人のキスまでの距離は、縮まったかのように見せかけて、広まった…。

キスまでの距離 その3（後書き）

せっかく間接キスまでいったのに…（T—T）

2人がキスできる日はくるのか!？

ジェラシーパニック（前書き）

智呂様リクエスト、平和

ジェラシーパニック

彼は非常にイライラしていた。

何故なのかは、彼の視線の先を見ていただければお分かりになると思う。

そう。

彼は自分の恋人を見て、イライラしていたのだ。

いや、正確には恋人と話している男に対して、だが。

何はともあれ、自分の彼女が別の男と話していたら、おもしろいこととは何一つとしてない。

そんなこんなで、彼はイライラしていたのだった。

やがて彼女は男に手を振って、こちらに戻ってきた。

「何の話してたんや？」

眉間にしわが寄るのを感じたが、元には戻せない。

「道教えとっただけやけど。平次、顔怖いで？」

そう言っただけで彼女は屈託のない笑顔を向ける。

その笑顔に、平次も一瞬頬を緩ませそうになるが、必死にこらえて先に歩きだす。

「あつ。平次、待って！」

その後を急いで追いかけてくる和葉がなんとも可愛らしい。

それが嬉しくて、余計に早く歩く。

途中振り返っては、ポニーテールを揺らしながら走っている和葉を見た。

付き合ってもう二年、二人は二十歳になるが、相変わらず平次は和葉だけ。

もちろん和葉も平次だけ。

「なあ平次。なんか怒ってんの？」

「別に」

「嘘や！さっきからずうっと顔しかめとんもん」

頬を膨らませる彼女が愛しくて、平次はようやく笑う。

「何でもあらへんわ。気にすんな」

「…ならえけど」

平次は和葉に手を差し出した。

「いくで？」

「うん！」

嬉しそうに頷いて、和葉も手を握る。

「どこ行くん？」

「この間大滝はんに教えてもらたお好み焼屋とかどうや？」

「行く行く！」

平次が言うことすべてに色々な反応を示す彼女。

笑ったり、怒ったり、泣きそうな顔をしたり、やっぱり笑ったり。

「うわぁ…めっちゃ混んでるやん」

「せやな」

大阪でも人気の店らしく、ちょうど昼時の今は長蛇の列ができていた。

「ちょっと店ん中見てくるわ。待つとき」

そう言つて平次は一人店の中へ。

店員にそれぐらい待つかをたずね、すぐに出た。

「おい和葉あ。一時間待ちやと…」

だがそこには彼女の姿はない。

「和葉？」

平次は辺りを見回した。

すると、店の脇で見知らぬ男を会話する和葉が。

「アイツは…」

半ば呆れながらも、和葉の方へ向かう。

「あつ、平次！」

「何してんねん？」

平次が頬をピクピクと痙攣させつつ聞くと、やはり和葉は笑顔のまま言った。

「このお店は入れそうにないから、別のお店のこと聞いとったんよ、ね？」

隣の男に同意を求める。

男は平次の出現に多少がっかりした表情をしながらも頷いた。

「そーかそーか。でも必要あらへんわ。いくで」

「ちよつと、平次い！」

無理矢理腕を引っ張られ、さすがに今度は不機嫌な顔になる和葉。

「なんなん？やっぱ怒つとるやん」

「そら怒るわ、ボケ！」

いきなり耳元で叫ばれ、和葉は耳を塞ぐ。

「お前は隙がありすぎるんや！無闇に男に話しかけんなや！」
「何で？」

和葉はキョトンとした目で聞くが、平次は答えない。

いや、答えられない。

これはただの嫉妬だから。

「と…とにかくや！お前はボケつとしとるから、すぐに男が寄ってくる。でもお前は、オレの傍にだけ、おればええんや！せやから…」

平次は何かを和葉に向かって放り投げた。

「あつ」

和葉が慌ててキャッチする。

「そ、それ、左手の…そ、そこにやつとけ！」

平次は顔を真っ赤にさせながら叫ぶ。

和葉はポカンとした表情のまま、とりあえず手の中の指輪を見た。

「もらってええのん？」

「え、ええにきまつとるやろ」

すると、和葉は花のような笑顔を見せた。

「おおきに、平次！」

その表情から、平次は自分の遠回しなプロポーズが通じなかったことを感じ取る。

和葉が平次にプロポーズされたと理解したのは、家に帰り、父親にその指輪を見せた直後のこと。

ジェラシーパニック（後書き）

鈍感和葉ちゃんにジェラシー平次君。

プロポーズ話でした

次回も見てください

秋祭り（前書き）

お祭りでのワンシーン。

快青

秋祭り

「トルコアイス？何コレ？」

「あつ、あのクレープおいしそう！」

人が行き交うお祭りの会場の中、元気にはしゃぎまわる2人の少女の姿。

「わあ、見て見て蘭ちゃん！あのアイス、すっごい伸びてるよ！」

「ホントだ！すごーい！」

青子はトルコアイスの屋台の前で興奮している。

その様子が嬉しいのか、トルコ人のおじさんは笑ってさらにアイスを伸ばした。

それを見てまた青子と蘭はキャッキヤと声を上げる。

「ねえねえ、快斗！快斗も見てみなよ」

と、青子はうしろを振り返って快斗に言うが、快斗は興味なさそうにしている。

「新一！何でこのアイス伸びるのかな？」

と、蘭も新一に向かって尋ねるが、新一は知るかと言わんばかりにため息をつく。

「何よ！お祭り行こうって言ったのは快斗のくせに」

青子はムスツとしながら言った。

「まあまあ。せっかくのデートなんだから、いいじゃない」

「違うよ。快斗はあの、学生半額のクレープが目当てだっただけ」

蘭の慰めの言葉も効果はない。

青子はいっ先程快斗と共に行ったクレープ屋を見た。

「今年は学生だけの特典があるって聞いたけど…それだったんだ」

クレープを満足そうにほおばる快斗を、蘭も多少呆れながら眺める。

「蘭ちゃんも工藤君と行ってきなよ。いつまでも工藤君をバカイトにつき合わせるわけにいかないし」

「それなら大丈夫。どうせ新一はそこまで楽しんでないし」

それに…と、蘭は続ける。

「黒羽くんだって、ホントは青子ちゃんと一緒に来たかっただけなんじゃない？照れ臭かっただけよ」

「そ、そんなことないよ…」

そう言いながらも、少し青子の頬が緩む。

「あっちの方に行けば、屋台が少なくなつて、ほとんど二人っきりだよ」

蘭が提灯のやや少なくなつた暗い道を示す。

「う、うん…」

「頑張つて、青子ちゃん」

蘭がそつと背中を押すと、青子は戸惑いながらも快斗の方へ行く。

「か、快斗…」

「ん？」

快斗はクレープの残りを口に放り込む。

「あ、あっち行つてみない？」

青子は蘭に言われた方の道を指差す。

「あつちつて何もねえだろ？」

「い、いいから！ほら！」

半ば強引に快斗の腕を引っ張り、青子は暗い道へと行く。

「どうしたんだ？」

「いいじゃない。はい、私たちはこっち」

蘭と新一は正反対の方へと消えて行つた。

「真っ暗じゃねえか」

「そ…そうだね…」

止めておけばよかったかもしれない。

蘭には申し訳ないが、後悔が押し寄せてくる。

先の方からお囃子の軽快なリズムが聞こえてくるが、ここはかなり静かだ。

「どうかしたのか？」

突然快斗は言った。

「な、何が？」

「や…お祭りなのに妙に静かだからよ…」

「そ、それは…」

必死にいいわけを考える。

本当のことは、ちょっと照れくさくて言いにくい。

「ト、トルコアイス、食べたかった、かな…なんて」
「…は？」

快斗は呆れたように声を漏らした。

「んなことかよ」

「い、いいじゃない、別に」

思わず向きになると、快斗は笑った。

「そうそう！それでこそアホ子だよな」

「あ、青子アホじゃないもん！」

だが快斗はまだ笑っている。

「来いよ」

手招きされ、青子はまた元の場所に戻る。

「何？」

「よく見てろよ」

快斗はぎゅっと手を握り、再びゆっくりと開いた。

すると、ポンと音がして、快斗の手には先程のトルコアイスがあった。

「わあ！」

青子が歓声をあげていると、トルコ人のおじさんがやってきた。

「お客サン。困ルネ。才金、払ッテナイヨ？二百円。チヨウライ」

「あ、すみません」

快斗は慌ててお金を払った。

「快斗！これ、おいしいよ」

青子はアイスを差して、ペロツと一舐め。

「おいしーい」

「じゃ、オレも！」

そう言うと、快斗は青子の手からアイスをとって、勝手に舐めはじめた。

「あーっ！」

「うめー！」

「それ青子の！」

「いいだろ、買ったのはオレなんだから」
「だめ〜！」

アイスの奪い合いに夢中で、密かに間接キスをしていたことに気付かない2人だった…。

秋祭り（後書き）

昨日、私の地域でも秋祭りがあったもので…。

あのトルコアイス、おいしそーだったなあ。

すごい伸びるんですよえ。

ま、財布を忘れてかえなかったのですが…トホホ（T|T）

次回も見てください

占いの館 園子&哀（前書き）

今回は、園子と哀ちゃん編

占いの館 園子&哀

カララン

「こ、こんにちはあ…」

見るからにうるさそうな娘じゃ。

「名は？」

「鈴木園子です」

「何を聞きに来た？」

まあ、聞かずともわかるが。

「今遠恋中の、彼とのことなんですけどお」

…やはり。

「なんか連絡とかちつともくれないし、もしかして、変な女に捕ま
つてないか心配で」

その前に自分の行いを見直せい。

「おぬし、相当気が多いな」

「えっ？そ、そんなこと…」

「あまりフラフラしないようにするんじゃない。もしその者がおぬし

の運命の相手だとしたら、おぬしのその性格を直さぬかぎり、成就せぬ。少しは大人しくしておれ」

「なっ…ま、マジで？」

これでちつとは懲りるがよい。

「本当にその者を慕っておるのなら、そうするべきじゃ」

「は…はあい」

「それともうひとつ。その装飾、外しなされ」

アクセサリーとかいうものは見ていて気分が悪い。

ごてごてと着飾るより、ありのままの素の自分が一番良いのじゃ。

カララーン

ほお、また子供…。

今度はおなごじゃな。

「灰原哀」

「本当の名と姿ではないな。良かろう。おぬしの悩みは？」
「さあ？好きに占って」

ふむ、なかなかきっぱり言うの。

嫌いではないぞ。

「良い人生とは言えんようじゃな」

「あら、そう？」

「今も何かの罪に心を痛めておるな。安心しなされ。おぬしの責任ではなかるう。もっと自分を大事になさい」

「…できるかしら、この私に」

やはり普通の子供じゃないの。

「…恋かの」

「え？」

「おぬしが密かに想いを寄せている者には、すでに心に決めた者がおる。だからおぬしは諦めておる。違うか？」

「…どうかしら」

図星のようじゃな。

「おぬしはまだ、本当の運命の相手とやらには出会っておらんな。いや、出会っておっても、気付いておらぬ。すぐ近くで、すでにおぬしを慕っておる。じゃが…もう一人、おる。その者はおぬしともう一人の間で迷っておるな。おぬしを選んだのであれば、その仮面を脱ぎ捨て、その者の胸を思い切って飛び込んでみなさい。わしが言えるのは、それだけじゃ」

ちと、くさいかの。

「そう…覚えておくわ」

あの娘の真の姿、見てみたい気もするの。

本当は実に心の美しい娘じゃろう。

ダイヤモンドのように硬く壊れにくい仮面のせいで、自らを出しきれておらぬだけじゃ。

その運命の相手とやらが、この者を変えるかもしれないな。

楽しみじゃわい。

占いの館 園子&哀（後書き）

リクエストよろしくお願いしますm（
—
—
）m

キヌまでの距離 その4（前書き）

おそらく完結（汗）

キスまでの距離 その4

「…おせえ」

このセリフを何度言っただろう。

言っても言っても待ち人は来ない。

新一は時計を見た。

待ち合わせにはいつもはやめに来る彼女にしては珍しく、もう二十分は遅刻している。

そして、なぜかいつも遅れてくる彼は今日に限って早くついてしまった。

昨日電話した時は、ちゃんと今日の予定を覚えていたはずなのだが…。

まさか、まだ家にいるのだろうか？

携帯を取り出し、蘭の家にかけてみる。

『ふあい。もーりたあんでーじむしゅお』

電話の向こうで、間の抜けた声がする。

「お、おっちゃん？」

昼間から飲んでやがる。

その一言を飲み込んで、新一はたずねた。

「ら、蘭、知りません?」

『蘭ちゅわんはお留守どえーす』

「そ、そう。じゃあ…」

どこに行ったか、と聞こうとしたが、どうやらテレビでアイドルのライブを見ているらしく、その質問は小五郎の歓声の中へ消えた。

ダメだ、こりゃ。

「失礼しまーす…」

もはや何も聞いていないと思うが、新一はとりあえずそう言うてから電話を切った。

「あの酔っ払い…」

ブツブツと文句を言ってみるものの、それで蘭が来るわけでもない。

もう一度辺りを見回してみたが、やはり来ていない。

となると、今度はアイツにかけてみようか。

『もしもし? 新一君?』

「園子か?」

園子はやけに早口で言った。

『なんか用？アンタ達今日デートでしょ？』

「蘭が来てねーんだけど、なんか知らねえか？」

『知らないわよ！こっちだって久しぶりに真さんに会ったから忙しいの。じゃあね！』

そのままきられるかと思ったら、ちがった。

『でも蘭、昨日一緒にショッピング行った時はデート楽しみにしてたわよ』

「あつそ…」

『ま、その辺ぐるぐる回って探してみれば？今日の蘭の服はあたしを選んだから、きっとビックリしちゃうわよん』

そう園子は楽しげに言って、電話を一方的に切った。

「お、おい！」

どういうことだ？

探せ？

言われた通りにするのも癪だが、新一は待ち合わせの公園を離れて蘭を捜しに行った。

しかし、探すと言っても蘭らしき人影は見当たらない。

途中、犬を連れた中年のおばさんとやけに露出度の高い服を着たギヤルとすれちがったが、まさかと思って通り過ぎる。

公園に男が数人たむろっているのは、そのギャルのせいだろうか？
確かにスタイルは良いが、何だか園子に似ている気がした。

苦笑して再び時計の側に戻ったが、やはり蘭は来ておらず、もう約束の時間を三十分は過ぎていることに気付く。

もう蘭の携帯には五、六回かけているが、一度も出ていない。

もしかして、蘭の身に何か…。

ところが、その携帯が突然なりだした。

「うわっ」

あまりに唐突で、思わず驚く。

だがディスプレイに表示されている名前を見て、慌てて通話ボタンを押す。

「ら…」

『ちよつとお。今どこにいの？』

「…は？」

電話から聞こえる第一声に、返す言葉が見つからず。

『私も結構遅れたけど・・・まさか来てないの？』

「お前こそどこにいただよ？」

やつのことでそう言い返すと、蘭のあっけらかんとした返事が来る。

『米花公園の時計のどこだけど？そこにしようって言ったの新一じゃない』

驚いて辺りを見回すが、蘭の姿はない。

いるのはベンチで眠りかけているおじいさんと、先程のギャル。

そしてそのギャルに付いて来たらしい男数人。

「だ、だからどこだよ!？」

「ここだって言ってるでしょ!」

近くで怒鳴り声をあげられ、新一は飛び上がる。

「何度も言わせないでよ!」

しかしながら、新一は言い返さない。

いや、正確には言い返せない。

「お、お前…誰？」

「…ハア!？」

目の前のギャルはマニキュアを塗った爪を新一の顔の前につきたてる。

「アンタ、自分の彼女の顔もわかんないわけ!？」

「えっ？」

新一は一瞬、携帯を落としそうになった。

なんとか持ちこたえて、そのギャルの顔をよく、よく見つめる。

「ら…蘭？」

「そうよ」

「マジで？」

「そうよ！」

新一は頭を抱えた。

「お前なあ・・・なんてカッコしてんだよ！」

「え？何が？」

蘭は何重にも重ねたつけまつ毛をパチパチとさせる。

他にも、胸元の開いた服やショートパンツ、ピアスをつけたりメイクをしたりと、蘭らしくはない格好だ。

「今すぐ着替えろ！」

「何だよ？」

「いいから！」

「替えの服なんか持つてゐるわけないでしょ」

蘭は納得のいかない様子で言っていたが、新一はそれどころじゃない。

ひたすら蘭を下心丸出しにして見つめている男を睨んでいる。

「園子のやるオ…」

よりもよって、こんな服を選ぶとは。

「いいじゃない。たまにはこういうの着たって」

「ダメだ！」

「何でアンタが決めんのよ！」

デートの前にケンカ腰になる2人。

チャンスかと男たちが目の色を変えたのが新一の視界に入る。

カチン、と頭の奥で音がした。

次の瞬間、新一は未だに文句を言っている蘭の手を引き寄せていた。

「ちょ…っ」

戸惑う蘭の唇に、自分のそれを半ば無理やり押し付ける。

もちろん、横目で男たちを睨んだまま。

その様子を見た男たちは、がっかりしたように去っていった。

何はともあれ、二人はキスまでの距離をゴールすることができた。

だが…この後、蘭の怒りの鉄拳が飛んできて、新一がデートできる状態ではなくなったことは、言うまでもない…。

キスまでの距離 その4（後書き）

ゴールで来て、良いのやら悪いのやら…。

リクエスト募集中

占いの館 和葉&平次（前書き）

お次はこの二人！

占いの館 和葉&平次

カラカラン

またうるさそうな娘じゃわい。

「名は？」

「遠山和葉います！よろしゅう頼みます」

「…関西から来たのかの」

「はい！ここ、大阪でもむっちゃ有名で、こっちの友達に案内してもらたんです」

誰じゃ、この館のことをベラベラ喋りおったのは…。

わしは大勢の人間に囲まれるのは嫌いじゃ。

「それで…おぬしの相談は？」

「あのう…幼なじみのことなんやけど…」

はて、前にもあったかの。

「おぬしはその者に素直に甘えておらんの。その者もまた、おぬしの存在が近すぎて、まだ自分の気持ちに気づいておらぬ」

「じ、じゃあへい…その人も、あたしのこと、その…幼なじみ以上に、思てるんやろか？」

また同じ質問じゃ。

「わしが知るわけなかるう。じゃが、わしの言うことをよくお聞き」
「は、はい！」

「おぬしらは互いに意地を張りすぎじゃ。たまには一步譲り、あまり喧嘩はせぬよう。その者が時には不愉快な発言をするかもしれぬが、少しは堪えなさい。気をつけなされ」

「わかったわ。おおきに！」

…本当にわかったのかの。

カララララーン

む！

不吉な気配じゃ！

「こんにちはー。邪魔すんでえ」

「男！そこで止まれ！」

な、なんじゃ、この不愉快なオーラを放つ奴は！

「おわっ！な、なんやねん、ばあさん」

「ばあさん？ばあさんじゃと！？わしはまだほんの百二十歳じゃぞ！」

失礼な奴じゃ、ったく。

「その椅子、一步下げて座るがよい」

「あ、ああ。これでええんか？」

ふむ、これならまだ良かろう。

うるさい者が近くにいと、わしの力が鈍る。

「名を名乗れ」

「服部平次や。あつ、お、オレは何も好き好んで来たわけやあらへんで。ただ、幼なじみの女に行けって言われてな。しつっこいんよ、その女がまた…」

「少しは黙らんか！集中できんじやろに」

「す、スマンな」

全く近頃の若者は…。

態度がなつとらん！

「それで、何の悩みじゃ」

「特にあらへんな…。とりあえず、全体的に頼んます」

図々しい奴じゃわい。

「幼なじみの女がおると言っただな」

「ああ。言っただ」

「どう思っておる？」

「どうって…そりゃ幼なじみやろ。子分とも思とるけどな」

鈍感とは悲しきものじゃのう…。

「その者とおぬしは、何やら強いもので結ばれておる」

「ん？あー…アイツがよく言う、鉄のなんちゃらってやつやな。これがもうごつつアホらしい話でな。ガキン頃たまたま…」

「ダラダラ喋るでない！黙ってわしの言葉が聞けぬのなら、この館から出て行けえ！」「わ、悪かったわ。すみません」

いかんいかん。

感情に流されてしまったかの。

「その者は時期に、おぬしにとってかけがえのない存在になるじゃろつ。互いに意地を張らず、喧嘩はほどほどに」

「意地っ張りなんはアイツや！オレは大人として相手してやって…」

「それじゃ」

「は？」

「おぬしはまだ、本当の自分の気持ちとやらには気付いておらぬ。たまには意地も見栄もなしに、じっくりとその者と話してみるがよい。素直に自分の心と向き合うこと。それがおぬしに必要なことじや。その者を大事におし」

「お、おお。なんやようわからへんけど…」

「あまり心配もかけぬようにな。おぬしも多少自由奔放な所があるようじゃからの」

「…も？他にもおったんか？」

おっと。

口が滑ってしまった。

「何でもないわ。さっさとわしの前から消えた方が良いぞ」

同じような匂いがしたのう、あの青年達…。

せいぜい、未来の恋人を大事にするのじゃな。

占いの館 和葉&平次（後書き）

最近早くもネタ切れのusaです

リクエストよろしくお願いしますm（
）m

異色な二人（前書き）

NOT恋愛

異色な二人

喫茶店の中、一人の少女がこっそりため息をつく。

彼女はもう、二十分も前から、忙しい恋人を待っていた。

だが彼が待ち合わせに遅れるのはいつものこと。

温かい紅茶でも飲みながら、のんびり待とう。

カップを持ち、ホッと一息。

外をぼんやり眺めていると…

「わりい！」

突然声がして、彼女は恋人かと思って振り向いた。

そこには頭を下げた青年が一人。

「しん…」

「わりい、青子！寝坊しちまって…」

青年はそう言って顔を上げた。

顔も声も、彼女の恋人にそっくり。

だが…

「あの…私、青子さんじゃないんですけど…」
「えっ？…あぁっ！？」

青年は凍りついた。

（め、名探偵の彼女…）

そのことに気づくと、少し引きつった笑みを浮かべた。

「あ、ごめんごめん。急いでたから…」

一刻も早く立ち去ろうと、青年は辺りを見回す。

が、こういう時に限って探している人が見つからないのか、冷や汗をかいて立ち尽くす。

「もしかして、まだ来てないんじゃない？ここ、座っていいですよ」
少女はにこにこ笑って空いた椅子を指差すが、青年は座ろうとしない。

「だ、大丈夫！すぐ見つかるから…」

そうこうしているうちに、店のドアが開く音がした。

誰かがもうスピードで入ってきて、一瞬迷ったように足音が止まる。

そして奥の方の席へ…。

「わりい、蘭！急な事件で…」

「あ、あの…私、蘭て人じゃないんだけど…」

その声を聞き、少女と青年はそちらを向いた。

「新一！」「青子！」

二人が叫ぶと、新一と青子も振り向く。

「蘭！」「快斗！」

ようやく巡り会えた？恋人達。

ところが彼女達は不満げな表情。

「ほお。新一は私と他の女の子との区別もつかないわけ…」

「あー…別にそういうことじゃ…」

「快斗、その子だあれ？青子もう三十分ぐらい待ってたんだけど…」

「わ、悪かったって」

名探偵と大怪盗も、彼女の前では形無しだ。

すっかりへこへことしている。

彼女達が自己紹介を始めても、新一と快斗は下を向いたまま。

「ねえ！せっかく知り合ったんだし、一緒に遊ばない？」

蘭が提案すると、当然青子は賛成。

（名探偵と一緒…）

快斗はゾツとしたように青ざめる。

普段追う身、追われる身である以上、それはできるだけ避けたい。

「い、いや、オレ達とはかく、せつかくのデートなんだろう？二人っきりの方がいいでしょ？な？な？」

半分願うかのような目で新一と蘭を見る快斗。

しかし、その願いは届くことなく…。

「や…。オレらは別に構わねえけど」

新一の即答に、快斗はがつくりと頂垂れる。

「…お前、どつかで見た顔だな？」
と、新一は快斗の顔を覗きこむ。

（ば…ばれた？）

「それは、二人の顔が似てるからでしょ」

焦りが面に出そうだった所を、蘭の一言で救われる。

「そうそう！最初に見た時はびっくりしたもん」

自分たちのことは気付いていないのか、蘭と青子はキャッキヤと笑

う。

とりあえず息を吐いていると、青子が不思議そうに快斗を見た。

「どしたの、快斗？」

「あ、あーっ！そ、そういえば、オレと青子是用事があったんだ」

快斗は突然立ち上がると、青子の腕を引っ張った。

「用事？そんなのあったっけ？」

「いいから行くぞ！」

半ば無理矢理青子を外に連れ出すと、快斗は肩の力を抜いた。

「ねえ、どうしたの？」

「何でもねえよ……。それより、映画行くんだろ？」

「あ、そっか」

青子はいそいそとチケットを取り出した。

今女の子に大人気のラブロマンスものだ。

快斗にはさっぱりわからないが、青子は嬉しそうに笑っている。

それを見ると、さすがに悪い気はしない。

「ほら快斗！早く行こ！」

そう言うと、今度は青子が快斗の腕を引っ張った。

「やっぱいいなあ。感動しちゃう！」
「ふあ…」

パンフレットを抱き締めて映画の余韻に浸る青子を尻目に、快斗は欠伸をしている。

「これのなーにがいいんだか…。ただ『ああ…愛してる』だってよ。おー気色わりっ」

大袈裟に二の腕をさする快斗。

それを青子が睨みつける。

「もう！ちよつとぐらい感動してくれたっていいじゃない！」

青子の声とともに、もう一人誰かの声が重なる。

「え？」

「…ゲ」

顔が引きつるのを快斗は感じた。

今朝の占いを見ておけばよかった。

そうしたら、ラッキーカラーかなんかで、この状況を免れたかもしれないのに。

「わあ、青子ちゃん！」

「蘭ちゃん！二人もここ来てたの？」

蘭と青子が再会を手を取り合って喜ぶ。

「でもね、新一っいたらさつきからずっと欠伸ばっかして…。おまけにこれからあれ観ようって言いだすのよ」

蘭が指差したのは、推理マニアに人気のいかにも血生臭そうなミス
テリー。

デートでこれ観ようと言うとは、流石名探偵。

心の中で快斗はひそかに拍手を送る。

「あんなくだらねえもんよりもよっぽど役立つな」

いつの間にか新一は快斗の隣に来ていた。

「そ、そうか」

「大体、なーにが『あなたと一緒にならどこでも行けるわ』だよ。非
現実的だな」

髪をポリポリと掻き、新一は言った。

「ねえ新一。青子ちゃんがこれからケーキバイキング行くんだって
「四人で行こうよ」

こうなったら腹をくくろう。

ほんの一、二時間一緒にいただけで正体がばれるわけでもあるまい
し。

冷静でいよう。

そうだ、ポーカーフェイスだ。

今こそそれを実践すべきだ…。

「新一、行くよ!」

「快斗も早くう!」

それぞれの彼女が呼んでいる。

そっちへ行こうとした快斗の肩に、新一はポンと手をおいた。

「さ、行こうぜ。怪盗キッドさん」

異色な二人（後書き）

必死にかくしても結局ばれらると言う、原作にはありえない怪盗キツ
ドの大失態（笑）

コトバでいって…（前書き）

新蘭です

コトバでいつて…

「それでホームズがさ…」

いい加減ため息をつきたくなる。

彼：新一は、もう三十分はホームズについて語っている。

新一のホームズ話は幼き頃より聞かされているが、さすがに疲れる。

「ねえ、たまには別の話してよ」

「あ？どんな？」

彼女：蘭の言葉に、新一はキョトンとした表情を返す。

「べ、別の話は、別の話よ…」

「じゃあ…この間あった事件のこととか？」

「違います！」

少し怒り気味の蘭を見ながら新一はケラケラと笑う。

「それなら…怪談話でもするか？」

「きゃああっ！」

新一が恨めしそうな声を出すと、蘭が悲鳴をあげる。

「ははっ。冗談だっ」

蘭が何か言い返そうとしたが、その前に新一の携帯のバイブが聞こえた。

「はい。…ええ、わかりました。…はい、すぐ向かいます」

電話を切り、チラッと蘭を見やる。

「いつてらっしやい」

蘭がぶつきらばうに言つと、新一は顔の前で手を合わせてから走り出した。

ただでさえ事件続きで、最近まともに会えていないのに…。

思わず机に突っ伏していると、園子がやってきた。

「アンタって本当に素直じゃないねえ…」

「な、何がよ」

「行つてほしくないんでしょ？そう言えばいいのに」

「ち、違っわよ！」

頬を赤らめて言う蘭を、園子は呆れ顔で見つめている。

「蘭。それでちゃんと感じてんの？」

蘭がわからないという風に黙っていると、園子は言った。

「愛されてるって実感！あるの？ないの？」

「あ、愛って…別に私は…」

蘭は曖昧に答える。

「アンタ達さあ…もうすぐ恋人になって1ヶ月だけど…進展あったの？」

園子はまさかと思いながらもたずねる。

「進展？」

「キスとか」

園子の口からでてきた単語に、蘭は顔を真っ赤にさせた。

「キ、キ、キス！？」

「恋人なら当たり前でしょ」

嫌な予感的中。

園子は呆れるのを乗り越し、笑ってしまった。

「アンタと新一君がその手のことに疎いのは知ってたけど、キスもまだなんだ？」

「…うん」

「いつそのこと、蘭からしちやえば？」

からかい半分に言うと、蘭は激しく首を振った。

「むっ、無理無理無理！」

「いいじゃない。今は女の子から一歩リードしてあげるべきよー！」

「だ、だって…」

蘭は何か反論しようとして押し黙った。

「どうしたの？」

「本当に新一は、私のこと好きなのかなって」

いきなりの蘭の言葉に、園子は持っていたジュースを落としそうになった。

「ちょ、ちょっと。いきなり何言い出すのよ？」

「だって新一から直接好きって言ってもらったの、ロンドンの時だけだし…」

小さな声で自信なさげに言う親友の姿に、園子は急に立ち上がると言った。

「なら、言わせればいいのよ！」

「えっ？どうやって？」

「それは園子様に任せなさい！」

瞳を見開いて輝かせる園子に、蘭は少し不安を覚えた。

「あーっ！くそっ！」

警察も去り、少し落ち着いてきた中、新一は髪をかきむしっていた。

どうして自分はこう、素直じゃないのだろう。

さっきだって、蘭の話を茶化したりなどして…。

少しでも狼狽がでそうになると、笑って誤魔化して…。

終いには事件と言って逃げる。

おかげで蘭との時間は最近減ってきている。

これならもつと堂々と、蘭といたいと言つべきだった…。

「はあ…」

「どうしたの、工藤君？」

深いため息をつくと、後ろから佐藤刑事が心配そうに話しかけてきた。

「あ、いや、何でも…」

「蘭ちゃんとケンカ？」

「そついうわけじゃないんですけど…」

新一は頬を掻くと、思いきってたずねた。

「佐藤刑事は、高木刑事に何でも言っただけですか？」

「えっ？」

佐藤刑事はしばらく驚いたように新一を見ていたが、やがて考えこんだ。

「そうね…。私は、言っただけかも知ね」

「そうですよね…」

「ほら。私って、あんまり男の子の気持ちに敏感じゃないから。言ってくれなきゃわかんないのよ！」

そう言っただけ、佐藤刑事は苦笑する。

「でも蘭ちゃんも、きっとそうだと思うわよ。前に由美が言っただけ、女の子は大抵、言葉で言ってくれなきゃ伝わらないって」

「…そうですか。ありがとうございます」

「参考になった？」

佐藤刑事がいたずらっぽく笑うと、新一も同じように笑い返す。

「はい。とても」

そこで佐藤刑事は目暮警部に呼ばれ、本庁に帰ろうとした。

「それじゃ、ちゃんと伝えてあげてなさいよ！」

と、言い残して。

「やっぱそうだよなあ……」

新一は呟くと、踵を返し、走り出した。

帝丹高校は、すでに部活も終わったところが多く、静かだった。

それでも空手部は大会も近く、まだやってると聞いた。

久しぶりに、一緒に帰るか。

新一は昇降口近くで、蘭を待つことにした。

鞆から推理小説を取り出し、しばし読み耽る。

しかし、待てども待てども、蘭が来る気配はない。

「おせえな……」

三十分は経った頃、新一は携帯を開き、蘭にメールを送ろうとした。

ところが、その前に携帯が鳴った。

「園子……?」

珍しい、と思いながらも、メールを開く。

そこには、園子にしてはやけに小ざっぱりとした文面でこう書かれていた。

『大変！蘭が空手部の一年に体育倉庫の裏で告られそうになってる！急いで来て！』

「…は？」

突然のことに、それしか言葉が出ない。

次の瞬間、新一は走り出していた。

「だ、だから、オレ、毛利先輩が…」

いたいた。

新一は体育倉庫の陰に隠れ、そつと様子を窺う。

残念ながら、その一年生の顔は見えない。

それでも蘭の表情だけはわかる。

困ったような、焦ったような、戸惑った顔。

「毛利先輩と工藤先輩って、幼馴染なんですよ？ だったらいいじゃないですか！」

「あ、あの、私と新一は……」

蘭は必死に言葉を探している。

恋人だろ。そう言えよ！

新一が突っ込みを入れるも、それも届かず。

「そ、そのお……」

「オレは真剣に毛利先輩が好きですから！ 工藤先輩になんか負けませんよ！」

そう言うつと、その一年生はどこかへ走り去った。

見つけたらただじゃおかねえ。

ブツブツと言いながらも、新一は今来たような顔で、蘭の前に出る。

「よ、蘭」

「し、新一…」

途端に蘭は慌てたように言った。

「な、何してるの？事件は？」

「終わった。お前こそ、練習は？」

「私は…ちょ、ちよつと休憩に…」

「主将がか？呑気だな」

新一はそう言つて笑つたが、蘭は堅い表情のまま。

「…見てた？今の」

「…まあな」

隠してもばれてる。

新一は観念したかのように首をすくめる。

「なんで本当のこと言わなかったんだよ？」

「本当つて？」

「…恋人、つてさ」

蘭は不安げに瞳を揺らした。

「言つて良かったの？」

新一が目をぱちくりとさせていると、蘭は続けた。

「自信がなかったの。私は本当に、新一の彼女なのかなって」

「…んだよ」

新一は頭を押さえると言った。

「そんなの、当たり前だろ。オレだって不安だよ。蘭と一緒にいたいのかつて。オレは素直じゃねえし、事件ばつかだし、言いたいことの半分もお前に言っただけだよ…。それでもやっぱり、オレがお前の傍にいたいんだよ！」

最終的には大声で怒鳴ると、空気が抜けたかのように新一はその場に屈み込んだ。

「こんな事、言わせんなよ…」

すると、蘭は頬を赤く染めながらも言った。

「だって…言ってくれなきゃわかんないんだもん…」

瞳を潤ませ、赤くなる蘭の姿は綺麗だった。

新一は蘭の腕を引き寄せると、耳元で囁いた。

「好きだ」

「園子様のラブラブ大作戦、成功！」

仲良く寄り添っている新一と蘭を遠巻きに見つめながら、園子はほくそ笑んだ。

「ま、演劇部の鬘と空手部の練習着を借りたぐらいの価値はあったかもね」

手中の男ものの鬘と、未だに身につけている蘭の呼びの練習着をニヤニヤしながら見た。

「お幸せに」

トリック・オア・トリート！(前書き)

今日は10月31日！

と、言うわけで…。

チビ新蘭

トリック・オア・トリート！

今日の工藤邸は、いつもと何かが違う。

「ハッピーハロウィン！」

そう。

今日はハロウィン。

よって、この有希子主催のハロウィンパーティーが催された。

もちろん、参加者は全員仮装している。

布を被っただけのゴーストや、お面を被ってそれっぽくしている人もいる中、大半の人が面白がって手の込んだ仮装をしている。

「ハーン、英理」

「ああ、いたいた、有希ちゃん」

英理は有希子に手を振った。

「あら、雪女？」

「近づくと凍らせるわよ」

有希子は白い着物をひらひらとさせる。

「で、あなたは何の仮装？」

「見てわからない？有能な弁護士の仮装よ」

至っていつも通りの格好をした英理は、眼鏡の位置を直した。

「それに、今日はこの子を楽しませたかったから」

「まあ！可愛い魔女さんね」

魔女らしく大きな帽子を被って箒を手に持った蘭を見て、有希子は歓声を上げる。

ところが、蘭は仮装した有希子の姿を見て、いきなり泣き出した。

「うわーん！」

「あ、ら、蘭ちゃん？」

「そんな格好してるからわからないのよ。蘭。新一君のお母さんよ」
「ちがうもん！このひとおばけだもん！」

有希子の顔を見れば呪われるとも思っているのか、蘭はキュツと目をつぶって叫んだ。

「だから五歳にはまだ早いつて言っただでしょ」

「そんなことないわよ。うちの新ちゃんなんか見てよ。ほら」

有希子の指差す方を見れば、小さな男の子が狼男のマスクを引っ張って招待客を困らせている。

「コラ、新ちゃん！悪戯しないの」

「だってかあさん。このひとおかしくねなかったんだよ？だからいたずらしてやったのさ」

新一はませた口調で言うと、今度は別の客の所へ行った。

「男の子は元気ね。あの子は何の仮装かしら？」

英理は走りまわる新一の姿を見て、呆れたように言った。

「ドラキュラ伯爵よ。最初は牙をつけるの嫌がってね」

「何で？」

「さあ……」

二人が話している間中も、蘭はしゃがみ込んで耳を塞いでいる。

「蘭ちゃん。あっちでお菓子もらってくれば？」

「やーだー！」

誰かが話しかければ大声で喚き、手がつけられない。

「この子は本当に怖がりだから……」

「ま、しょうがないわよ。女の子なんだし」

困ったような顔の英理とは対照的に、有希子は笑顔。

「それに、新ちゃんが相手してくれるわよ」

「大変なんじゃない？ 新一君」

「大丈夫よ！」

そう言うと、有希子は新一を呼んだ。

お化けたちの間を縫って、新一が顔を覗かせた。

「なに、かあさん？」

「蘭ちゃんと一緒にお菓子もらってきて」

「ああ。いいよ」

新一は頷くと、蘭のもとへ行った。

「らん。おかしもらいにいこうぜ」

新一の声に、蘭は少し顔をあげた。

だが、また短く悲鳴をあげて泣きはじめた。

「あゝあゝ。新ちゃん。女の子は泣かせちゃダメよ！」

「なかせてねえよ！」

どこか楽しげにウィンクする有希子を、新一はジト目でにらむ。

「ちえッ。だからいやだったんだよ。こんなかつこ…」

そう言つて新一は、乱暴に牙を外した。

すると、ほとんどメイクをしていないため、新一の素顔が見える。

「しんいち？」

「そうだよ」

「やったあ！しんいちもともどったあ！」

蘭は嬉しそうに言つと、新一に抱きついた。

「おい、らん！はなれるよ」

新一は顔を真っ赤にさせて怒鳴るが、蘭は離れない。

新一の背中に回る腕が、少し震えていた。

「こわがりのくせに、くんじゃねえよ」

「だって、おかあさんがおかし、たっくさんもらえるっていったし、まじよさんのふく、かわいかったから……」

不貞腐れたように蘭は言った。

「でもだれもおかしなんかくないし、みんなおばけばかりなんだもん」

「らん。トリック・オア・トリート、っていえばいいんだよ！」

「トリック・オア・トリート？」

聞きなれない言葉に、蘭は聞き返す。

「おかしをくれなきゃいたずらするぞ！ってこと。だから、たとえばおばけでもおかしをくれなかったらいたずらしてやればいいんだって」

「そっか…そうなんだ！」

途端に蘭は顔を輝かせた。

「じゃあ、おかしもらえるの？」

「もちろん！いこうぜ」

「うん！」

二人は手をつなぐと、一緒に招待客の中へと潜り込む。

「トリック・オア・トリート！おかしちょうだい」
「はいはい、どうぞ」

メデューサの格好をした女性は、ニコニコしながら飴をくれた。

「やった！」

「な？こわくねえだろ？」

「うん。ぜんぜんこわくない！」

今日初めての蘭の笑顔に、新一はホッとしたような表情を浮かべる。

「トリック・オア・トリート！」

「ん？あゝごめんよ。さっき来た子の分でなくなっちゃったのお

…」

フランケンの老人はそう言って蘭の頭をポンと撫でた。

一瞬蘭はビクツとして身を縮めたが、もう泣きはしなかった。

「じゃ、いたずらしちゃうよ？」

「ほお、ドラキュラ君。何をする気かね？」

「こつするんだよ！」

新一はフランケンに飛び掛かると、無理矢理マスクを外そうとした。

「ああ、ああ、参った。降参だよ」

フランケンが両手を上げると、新一もおりた。

「つぎいくぞ、らん！」
「うん！」

しばらく経てば、二人の両手には抱えきれないほどのお菓子で一杯になった。

「あら。良かったわね、二人とも」

英理は二人に笑いかけたが、新一はさつと有希子の陰に隠れた。

「やあねえ、新ちゃんたら！」

有希子は笑って新一の額を突いた。

少し新一は不満げな顔。

「蘭、もうお化けは平気？」

「へいきだよ！だって、おかしくれるんだもん！」

蘭は英理にお菓子を見せて瞳をキラキラとさせる。

「おかあさん。おばけてこわくないんだね！」

すると、どこから声がした。

「じゃあ…わたしのこともへいき…？」

「きつ…きゃああッ…！」

突然現れた着物の女の子に、蘭はやはり悲鳴をあげて逃げた。

「そこ。それなんのかそつだ？」

「ざしきわらしよ！きまってるじゃない」

園子は口紅を拭きとると、ニヤニヤとした。

「あんまおどかすなよ」

「だいじょうぶ。らんはこわがりなままがいちばんいいんだから」

一人でお化けたちから逃げ惑う蘭を見ながら、新一はこっそりため息をついた。

ダブルデートにご用心!?(前書き)

亜由美様リクエスト

新蘭+平和

ダブルデートにご用心!?

人がたくさん行き交っている。

子供の笑い声。

友達とはしゃぐ学生達。

仲のいいカップル…。

ここはトロピカルランド。

様々な笑顔が輝く場所。

そしてまた、ここにも二人、笑顔の人が。

「あたしここ行きたいわ!」

「あつ、私も!」

地図を見ながら瞳をキラキラさせる少女。

「でもこつちもええなあ…あーっ!あたしには決められへん!蘭ちゃん決めてえな」

和葉は困ったような表情で蘭を見た。

「えっ?で、でも和葉ちゃん初めてなんだし、和葉ちゃん決めなよ」

蘭がそう答えると、和葉は再び地図に見入った。

「行きたいところぎょうさんあってわからへん。なあ、平次」

和葉が顔を上げる。

しかし、平次の姿はない。

「あれっ？平次どこ行きよったん？」

「そういえば…新一も」

蘭も辺りを見回す。

だが、彼女達の愛しい探偵の姿はない。

「さっきまでおったような…」

「そうね…」

はてさて、一体どこへ…？

「ちやうちやう！犯人はこいつや」

「ちげえよ。そう見せかけて実はこの人だって」

「はあ？お前何言うとんねん？」

「お前こそ何言ってんだよ」

「…おつたね」

「そうみたい」

二人は推理小説片手に騒ぐ平次と新一のもとへ向かう。

「せやから、犯人はこいつやって。間違いあらへん！」

「だからこつちだつつの！」

「いやいや、工藤。それは甘いわ」

「んなことねえだろ」

「二人とも、うるさいで」

「ここ遊園地なんだから。事件のことなんか忘れなさいよ」

和葉と蘭の言葉に、二人は黙った。

「こんなところまで来てなんでそんな話せなアカンの。帰ってからでええやん」

「わ、わかつたわ…」

平次は少し残念そうに呟く。

「今日は和葉ちゃんと服部君の案内役なんだから、これは没収！」

「あつ、おい！」

新一は蘭に小説を取り上げられる。

「さ、どこ行こつか」

「せや。こんな推理ドアホほつといて、あたしだけで楽しも！」

すっかり不機嫌な彼女たちを見て、新一と平次もため息をつく。

「お前のせいやぞ、工藤」

「あ？お前にも責任あんだろ。小説読みたいって言ったのお前なんだからよ」

「お前が持つてけえへんかったらこないなことには…」

「うるさいわ！ええ加減にせえ！」

和葉の一喝で、二人は再び沈黙。

「なあ蘭ちゃん。ミステリーコースター乗ってもええ？」
「えっ？」

思わず蘭は新一を見た。

二人にとってはあまりいい思い出とは言えない場所だ。

「そ、そこはちょっと…」
「ダメなん？」

和葉がしゅんとしていうと、平次も横から口を挟む。

「なんや？なんかあつたんか？」
「ちよつとね」

曖昧に答える蘭に、平次は目をキョトンとさせる。

「いいんじゃないか。行こうぜ、ミステリーコースター」

新一が後ろから声をかける。

「いいの？」

蘭は不安げに視線を揺らす。

「そんないつも事件が起きるわけじゃねえし。いいだろ」

そう言つて新一が安心させるように笑うと、蘭もこくつと頷いた。

「じゃあ、行こう、和葉ちゃん」

「ええの？」

「うん！」

和葉は嬉しそうな笑顔をつくると、蘭の手を引っ張って走り出した。

「なあ工藤。オレらここに何しに来たんや？」

二人で先に行く彼女たちを見ながら、平次が言った。

「さあな……。オレは確か、蘭にダブルデートって聞いた気がすつけど」

新一も苦笑気味に答える。

そう。

今日は久しぶりに大阪から出てきた平次と和葉と共に、トロピカルランドへ遊びに来たはず。

「オレもや。これは和葉とねえちゃん、オレと工藤のダブルデートになつてんで」

「気色わりいこと言ふなよ」

新一は大袈裟を腕をさする。

「スマンスマン。つい思ったこと言つてしもたわ」

大して反省していなさそうに平次は謝る。

「さっさと行くぞ」

「工藤。拗ねんなや」

一人で歩き出す新一を追いながら、平次は言った。

「拗ねてねえよ」

「お前の顔にはつきり書いてあるわ。ねえちゃんとのデート邪魔されて悔しい！ってな」

すると、新一の顔が一気に赤らむ。

「べっ、別にそんなんじゃ……」

「ま、和葉のアホが突然こっち来てもうたからなあ」

「お前だって一緒だろうが」

「オレはアイツに無理やり連れて来られただけや！」

平次はそう言ってそっぽを向く。

「嘘つけ。無理やり連れて来られた奴が、なーんでお泊まりセットなんか持ってきてんだよ」

「ばれとったか」

歯を見せてにっと笑う平次を、新一は冷めた表情で一瞥し、蘭達を追いかける。

「く、工藤！」

平次も慌てて後を追う。

ミステリーコースターにようやく着いたが、先に着いているはずの蘭と和葉がいない。

「アイツらどないしたんや？」

「まさか蘭の奴、こんなところで迷ってんじゃ…」

新一は呆れたように言うと、携帯を取り出す。

平次も同じく、和葉に電話をかけている。

「和葉の奴、オレらが遅なった時はギャーギャー騒ぎよったくせに、自分達は自由なんかい」

しかし…

「出えへんやんか」

「こっちもだ」

二人して携帯をしまうと、辺りをキョロキョロと見回す。

「ホンマに迷子なんか、アイツら…」

高校三年にもなって…。

「とりあえず、探しに行くぞ」

「お、おお」

どうやら、平次も騒いでいる状況でないことを悟ったらしい。

すぐさま真剣な表情になって和葉を探しはじめた。

「まさかアイツらまで拗ねてんじゃねえだろうな」

「それがホンマやったら怒鳴り散らしたるわ」

冗談みたいなことを言いながらも、表情は険しい。

「男と一緒にいたりしてな」

新一が苦笑交じりに言うと、平次が目を怒らせる。

「はあ！？オレらがせっかく探してやってるっちゅうんに、あのボケ…」

「あ、いや、かもだよ、かも…」

新一は慌てて取り繕ったが、平次は聞いていない様子。

「見つけたらただじゃおかへんぞ、アイツ…」

ブツブツと言いながら目を座らせている。

余計なことを言ったか、と新一も反省。

そして横を向いた瞬間、彼にとっては今まさに冗談と思っていた光景が飛び込んできた。

「おい服部」

「なんや？」

「いたぜ」

「ホンマか!？」

平次も新一に指差された方向を見やる。

やはり、二人の男に声をかけられている蘭と和葉を見て、新一と同じく頬を痙攣させた。

「誰やアイツ」

「知るかよ」

だから二人きりで歩かせたくなかったのに、と新一は心の中でぼやく。

ただでさえ可愛い容姿をしたあの二人なら、男の一人や二人、簡単にひっかかってくるかもしれないが…。

できることなら、新一の中の冗談のままであつてほしかった。

「ちよっくら行つてきよか」

と、平次がいつになく低い声で言った。

「本気出すなよ」

そう言いながらも、一番イライラしている新一。

平和なトロピカルランド内で悲鳴が響き渡ったのは、その三十秒後……。

「何で投げ飛ばさんのや、和葉」

「あんなの回し蹴りで一発だろ」

「し、しゃあないやん」

「男の子二人じゃ、こつちに勝ち目ないと思って…」

四人（正確には新一と平次の二人）のあまりの迫力のためか、周りに人だかりができている。

だがそのことに気付く余裕もないまま、新一と平次は怒鳴り散らしていた。

「大体急にいなくなったりすんじゃねえよ！探すのにもうちちょっと手間がかかってたら、お前ら今頃なあ…」

「そうや！もうちつと考えてから行動せえ！」

これに少しカチンときたらしい彼女達は言い返す。

「何よ！さっきまでは推理小説に夢中だったくせに！」

「せやせや！それなんに偉そつにさっきから…」

そう言われると弱い。

彼氏達が黙ったのを見て、ここぞとばかりに続ける。

「大体、なーにが『そいつら空手と合気道の達人だから、手え出したらあの世だぜ？』よ！最低！」

「そこまで自分の彼女悪く言えるなんて、アンタら男の風上にもおけんわ！」

「あ…いや、その…」

何だか危険な匂いがする。

本日二回目の悲鳴が響き渡ったのは、その直後…。

「さ、和葉ちゃん。二人で遊んでよっか」
「大賛成や」

「投げ飛ばされたんはオレか…」
「回し蹴りされたのはオレかよ…」

お互いにもらった氷を顔面に押し当てながら、新一と平次はため息をついた。

「なあ工藤…」

「あん？」

「やっぱあいつらのこと悪く言うんは、自分たちのためにもやめた方がええな」

「ああ…オレもそう思う」

一週間後、雑誌に小さく、こんな記事が載っていた。

“東西の名探偵、遊園地にて恋人と大喧嘩 名探偵も、彼女の喝には弱い!?”

A r e y o u h a p p y ? (前書き)

星野由香里様リクエスト

やきもち蘭ちゃん? かな。

新蘭

A r e y o u h a p p y ?

彼女は至って不機嫌だった。

何故不機嫌なのか。

それは彼女の恋人である、名探偵工藤新一に原因がある。

そう。それはつい数分前の出来事。

いつも通り、二人で他愛もない話をしながら登校してきた。

ちよつといい雰囲気になりかけていた。

ちょうど今は周りに誰もいないし、少しぐらいなら…。

二人はわずかに視線を交わした。

どちらからともなく、顔を近づける。

お互いの息がかかるほどに近くなった、その時！

「工藤先輩ーい！」

「キャー！カッコいいー！」

誰もいないと思っていたところへ、たくさんの女の子たちが現れる。

当然、二人は慌てて離れる。

「昨日も事件解決したんですね!？」

「すっごーい！」

「マジ最高！」

女の子たちは口々に言っでは黄色い歓声を上げる。

そのうち、蘭は新一の隣から引き離されていた。

「あっ……」

と、声をあげた時にはすでに遅く、新一を取り囲んだ一行は学校へ向かっていた。

あの中心に新一がいるのなら、近づくのは困難であろう。

結局、蘭は一人で登校する羽目となった。

以上が、蘭の不機嫌の原因である。

新一のファンからの妨害ならもう慣れっこだった。

だが、これで本当にいいのだろうか。

自分は今、新一といれて幸せなのか。

付きあった当初は良かった。

二人の時間があつたから。

なのに今は…。

「先輩！サインお願いします」

「握手してください！」

「私は写真！」

教室についてからもなお、新一はファンに囲まれっぱなしだ。

満更でもない表情をしているのが、余計に憎たらしい。

「あの推理オタクめ…蘭という妻がいながら。私がちょっと行って話してくるわ!」

園子がそう言って立ち上がりかけたが、蘭は慌てて止めた。

「べ、別にいいわよ」

「何だよ?」

「は、恥ずかしいし…」

園子は呆れたような顔になると、ハアツと息を吐いた。

「蘭。そのままじゃ、彼女の座を誰かに取られちゃうわよ!」
「そ、それは…」

蘭は口籠る。

「たまには素直に甘えなきゃ! 新一君ばっか蘭に甘えて、蘭てば、まるでアイツの母親よ?」
と、園子は新一を指差す。

「今蘭は、堂々と自分が新一君の彼女だって、いっていいんだから! 自信持つて!」

少し強めに蘭の背中を叩く。

蘭は一瞬痛そうに顔をしかめたが、すぐに笑顔になる。

「うん。ありがとう、園子」

「蘭。帰ろっぜ」

「新一…」

放課後、ファンから解放されたい新一は、蘭に声をかける。

だが、後ろにはまだ諦めきれない数人の女子の姿。

「いいの？」

「ああ」

蘭は不安そうに後ろの方を見る。

朝のように、また邪魔されたら…。

しかし、新一はさほど気にしていないらしい。

珍しく自分から蘭の手をとると、スタスタと歩きだした。

「ちよっ、新一！？」

それでも無言で新一は蘭を連れ出す。

「痛いってば！もう！」

教室の外へ出ると、蘭は新一の手を振りほどいた。

「どうしたの？」

「あ…いや、何でもねえよ」

そう言いながらも、どこか新一の表情は険しい。

「なんかあったの？」

一瞬、ギクツとしたように身を縮めた。

しかし、すぐに笑顔をつくり、もう一度何でもない、と言った。

「行くぞ」

「う、うん…」

どこか違和感を覚えながらも、蘭は新一の後を追う。

「あつ、工藤先輩、来た〜！」

「毛利先輩だけずるいですよ」

「うちらも一緒に帰る〜！」

校門付近で待ちかまえていた新一のファン達。

あつという間に新一を取り囲み、蘭は遠ざけられた。

「ちょ、ちょっと…」

言い返そうとしたが、ファンの女の子たちは新一の腕を引っ張ってさっさと歩きだし、蘭には目もくれない。

「お、おい」

ただ引つ張られていくだけの新一。

それを見ていくうちに、心の奥底から、何か黒いものが湧き上がってくる。

猛烈に苛々する。

今すぐに女の子たちを新一から引っぺがして、新一を連れ去りたい衝動にかられる。

でも…あとわずかな所で、勇気が出ない。

「蘭！」

新一が前の方から自分を呼ぶ声が聞こえてくる。

気付けば、新一達はかなり遠くに行っていた。

それでも女の子たちがニヤニヤしているのだけはわかる。

蘭は走り出した。

恥ずかしい？

そんなの、気にしてなんかいられない。

だって、好きなんだもん。

好きって気持ち、簡単に止められる？

きつと私には…一生無理。

蘭は新一達に追いつくと、一番新一に引つついていた女の子を新一から放した、

「きゃっ！？何すんのよ！？」

当然のことながら、女の子は甲高い叫び声をあげ、蘭を睨んだ。

「工藤先輩といーつつも一緒だから、調子に乗ってんのよ」

「でも先輩達って、正直恋人っぽくないしい」

「うちらが一緒に帰るくらい、いいじゃないですかあ。つーか、真面目に痛いんですけど？謝ってくれませんか？」

クスクスと笑って、蘭の様子をうかがっている。

だが、蘭はキツと彼女たちを見つめたまま、言った。

「周りからどんなふうに使われててもいい。新一の彼女は、私なの！」

これには新一も驚いたような顔をした。

「たとえばあなたが新一のこととれだけ好きでも、私だって大好きなんだから…こればかりは、絶対負けないんだから…」

「わ、わかったわよ。行こう！」

蘭の気迫に、女の子たちは引き上げた。

すると、蘭はその場にへなへなを座り込んだ。

耳元が真っ赤になっている。

「だ、大丈夫か？」

新一が慌てて手を差し伸べると、蘭は一瞬新一を見た。

ところが、すぐに目を逸らしてしまった。

「蘭？」

心配したように新一は蘭の顔を覗きこんだ。

「み、見ないで！」

蘭は顔を手で覆って隠した。

「今、私すっごい馬鹿なことして…。酷い顔してるから…」
「んなことねえって。ほら、立てよ」

新一は蘭の腕を掴むと、無理矢理立たせた。

頬が火照っていて、瞳が潤んでいる。

こんな状況にもかかわらず、可愛いと思う自分がいる。

「その…悪かったよ」

直視できず、やや視線を下げながら新一は言った。

「お前が辛い思いしてんのはわかってたけど、今まで、何もできなくてよ…。だから、寧ろ良かった。お前の正直な気持ち聞けてよ」

しばらく間をあけて、蘭はたずねた。

「ねえ新一。私と付き合って、何が良かったと思う？」
「…こういうこと、だろ」

そう言つと、新一は蘭に唇を重ねた。

「幼馴染のままじゃ、できねえから…」
「…そうだね」

はにかみながらも、蘭は答えた。

A r e y o u h a p p y ?

W e a r e v e r y h a p p y ! !

A r e y o u h a p p y ? (後書き)

多少二人のキャラが違ってるかもです… (汗)

すいません>(_ _)<

リクエストまだまだ受付中(^ O ^) /

お化け屋敷は愛の予感？（前書き）

星野由香里様リクエスト

文化祭での一コマ。

新蘭

お化け屋敷は愛の予感？

「すっごい人…」

「ホントねえ」

吸い込まれるように校舎に入ってくる人々を見て、蘭は口をポカンと開けた。

園子も隣で、驚いたように見ている。

「去年あんなことがあったのに、結構来るもんだねえ」

「それは言っちゃダメよ、園子」

高校生活最後の学園祭。

今年こそは何もなく無事に終わればいいが…。

去年と引き続き、蘭たちのクラスでは、演劇をやることになっている。

主役はもちろん蘭と、すぐ側で退屈そうにしている一人の青年。

「そんなんじゃ、王女を助ける騎士には相応しくないわよ、新一君」と、園子が呆れた声を出す。

「お前が勝手にやらせたんだろ」

新一は苦い顔をして答える。

だが園子はそれを無視し、時計を見つめた。

「うーん。うちのクラスの出し物までには、まだ時間があるわね…」
「じゃあ、どうか回ってこようよ。昨日の校内発表だけじゃ、回りきれてないし」

蘭が早速パンフレットを取り出したが、園子はその手をぐっと掴んだ。

「蘭。女子高生はもうすぐ終わるのよ？少しは彼氏と、いい思い出作ろうとか、考えないわけ？」
「えっ？」

いきなり真面目な顔で聞かれ、蘭は戸惑う。

園子はニヤリとすると、蘭に小声で囁いた。

「それならいいこと教えてあげるわ、蘭」
「な、何？」

園子は蘭からパンフレットを取り上げると、あるクラスを指差した。

「ここ！カップルで行くと、愛が深まるっていう、ジンクスがあるのよ」
「…はあ？」

蘭がよく見ようとパンフレットを覗きこむが、何故か園子は隠した。
「新一君と行ってきなよ。時間はたっぷりあるし。あんたは開演の

「一時間前に戻ってきてくれればそれでいいからさ」

「でも、そこ何をやってるの？」

「いいから！じゃあ、あたし準備あるから！」

「ちょ、ちよっと！」

結局パンフレットを持ったまま、園子は体育館に戻っていった。

「どうした？」

「あ…な、何でもない！」

慌てたように手を振る蘭を、新一は怪訝そうに見た。

「んで、園子はなんだって？」

「時間あるから、好きなところ行ってていいって」

「それならぐるぐる回ってようぜ」

「ね、ねえ！」

先に歩きだす新一の制服の袖を、蘭はキュツとつまんだ。

「あん？」

「ちよっと…い、行きたいところ、あるんだけど…」

「ああ。いいけど」

蘭は少し頬を緩めると、新一に並んで歩きだした。

「……ここ……の、はずなんだ……けど……」

「へー。お前にしっちゃ珍しいな」

保護者会特別展示 『ホラーストーリー』

不吉なロゴで書かれた看板の下には、暗い入口がある。

どこからどう見ても、これは蘭が大の苦手とするもの。

そう。お化け屋敷。

「や、やっぱりやめよつか……」

早くも逃げ腰の蘭。

しかし新一は、すでに中に入っている。

「し、新一？」

「入んねえのか？」

どうやら出る気はないらしい。

仕方ない…。

蘭は覚悟を決めると、深呼吸をした。

ゆっくりと足を踏み入れる。

「…暗いよお」

今になって、園子が催し物を教えなかった意味がわかった。

出たらとっちめてやる。

ところが、そんな強いことを思えたのも、この時までだった。

「きゃあああッッ！！」

数分と経たないうちに、お化け屋敷に蘭の悲鳴が響き渡る。

新一はというと、大して驚きもせず、蘭の前を歩いている。

「ま、待ってよ」

半泣きしながら蘭も後を追う。

だが、その前になにかに躓いた。

「いた…っ」

何か落ちている？

よく見ようと屈んだ。

見えた瞬間、見なければよかったと後悔。

「きゃーっ！っ！」

人間の首（もちろん作りもの）を見て、蘭は叫び声をあげた。

立ち上がろうとしても、腰が抜けて足に力が入らない。

「し、新一」

弱々しく新一を呼ぶが、返事がない。

まさか、気付かず先に…。

「薄情者」！」

「誰が薄情者だよ、ったく」

目の前に、スッと手が出された。

それが新一の手であると気付くのに、しばらくかかった。

「ちゃんといっつ」

「だ、だったら返事ぐらいしてよ、バカ！」

「したよ！お前が自分の悲鳴で聞こえなかったただけだろーが！」

蘭が黙りこむと、新一は蘭の手を掴み、引っ張り立たせた。

「…さっさと行くぞ」

「う、うん…」

手に新一の温かさを感じつつ、蘭は先に進みだす。

まだ怖いのに、不思議と外に出たくないと感じる。

もう少しだけ、あともう少しだけ続いてほしい…。

だがそんな小さな願いも叶わず、出口の明かりが見えてきた。

「ほら、もう終わったぞ」

「よ、良かった…」

そう口では言ったものの、少し残念さが残る。

「ところで、オレら何時までに戻ればいいんだ？」

「えっと…いけない！もう戻んなきゃ！」

二人はそろって体育館へ戻る。

開演までちょうど残り一時間。

ステージにはすでにいくつかのセットが並んでいた。

「お二人さーん。そろそろ着替えて〜」

ステージの上で指示を出していた園子が二人に気付き、大声を出す。

「園子！なんなのよあそこ！」

「ジンクスはホントよ。黙ってたのは悪かったけどさ…」

園子は顔の前で両手を合わせた。

「でもマジできくもんだねえ、あのお化け屋敷…」

「えっ？」

園子の視線の先には、まだ繋がれたままの手。

それに気付いた二人は、一斉に手を話した。

その日、一回目の劇は、主役が動揺していたため大失敗に終わった
そうな。

マーメイド（前書き）

前回の続き

新一君と蘭たちちゃんのクラスの、演劇のご様子。

もちろん、新蘭。

マーメイド

『えゝ…わ、私の心を掴んで離さぬ…み、魅惑の、姫君よ…』

薄暗くなった体育館の中、一人の青年がライトを浴びている。

舞台上で、一国の王子の衣裳を着せさせられた彼は、仏頂面で、セリフをつつかえながらも必死で演じていた。

『ど、どうか、私の声が聞こえているならば…私の前に、現れては…くれぬだろうか…』

その様子を舞台袖でみていた園子は、台本を握りつぶす。

「アイツ…私の台本を無駄にする気？何なのよあの一本調子は」

ライトの位置が切り替わり、淡いブルーのドレスを着た少女が浮かび上がる。

彼女は口を開かぬまま、胸に手をあてて、悲痛の表情になった。

すると、彼女の声がスピーカーから流れはじめた。

『ああ。愛しの王子様。今すぐあなたのもとへ駆け寄り、その姫が私と伝えたい…。この声が出ようならば、私はあなたに向かって、すぐさま愛の言葉を向けることでしょう。なのに…ああ、もう私には、あなたを愛していると言うことができない！人魚である私の尾びれの代わりに、私は人間の足を手に入れた。けれど痛くて歩けな

い。痛いと言うことすら、私にはもうできないのです！あの優しい魔女に、再び会えるものなら、せめて声を取り戻したい…。あの方に、私の愛の言葉を伝えたいのです！』

何と恥ずかしいセリフの連発。

会場内で笑っている生徒が何人かいる。

実際、今は泣く演技をしている蘭の顔が、微かに赤くなっていた。

続いて新一のセリフ。

『わ…私の耳に、あの美しい姫君の歌声が、離れないのだ。そうだ。国中の、娘たちを集めよう。その中から、あの声の主を見つけ出すのだ！もう一度会い、私のこのあふれる気持ちを伝えたい』

あまりにひどい棒読みに、クラスメイトまでも笑いだす。

さすがに園子も呆れかえった。

やがて最初の開演が終わり、二人は舞台袖に戻ってきた。

「ちょっとお二人さ〜ん…」

園子はズイツと近づくと、低い声で言った。

「なんなのよ、あの劇は〜」

「だ、だって恥ずかしいセリフばかりじゃない！もう少し普通のセリフにしてよ」

蘭が抗議しても、園子は首を横に振る。

「ダメダメ！この台本は、これでも十分に抑えたつもりなんだから！」

「はあ！？これでかよ？」

新一は台本をひらひらさせて顔をしかめた。

「何よ、新一君。私の台本に文句あんの？」

「まず、何でオレが王子なんだよ！？他にもやれそうな奴いっぱいいるだろーが！」

「姫が蘭だって決まったら、アンタしかやる人いないでしょ？」

園子は台本を取り上げた。

「とにかく、次は二時間後だからね！それまでにちゃんと練習しててよ！」

セット係に呼ばれ、園子はそっちの方へ向かった。

「ったく。これ以上どうしろっつーんだよ……」

新一は髪を掻き毟った。

「あと二回あるわけでしょ？これ……」

隣で蘭も疲れきった表情。

「何でオレが劇の王子役なんか……」

新一がブツブツと言っていると、蘭は目を伏せた。

「そんな、嫌？」

「あん？」

「私と一緒に演劇やるの、そんなに嫌なの？」

段々と涙声にかわっていく。

蘭の大きな目が潤む。

「や…あの、そう言うわけじゃ…」

「もったいいわよ！」

新一が何か言うより先に、蘭は立ち上がるとドレスをつまんで走り出した。

「おい、蘭！」

「ほっとけ工藤」

「そうそう。女はちょっと放っておいた方がいいんだ、って」

追いかけようとする新一に、男子達が叫んだ。

それを聞くと、少し落ち着かせた方がいいのかもしれない、と思い、新一は待つことにした。

しかし、蘭は戻って来ない。

そろそろ二回目の開演時間だ。

「新一君、蘭はどうしたの？」

園子があたりを見回してたずねた。

「どっか行っちゃまってそのままだよ」

新一はブスツとして答える。

「あーもう！始まっちゃうじゃない！」

園子は携帯を取り出した。

蘭のアドレスを開き、電話をかける。

「…ダメ、出ないわ」

「もうお客さん入ってるよ」

様子を見ていた女子たちが言った。

「今更お開きにはできないし…しょうがないわね、私が代わりに…」
「遅くなってごめん…」

後ろから突然声がかかり、全員がビクツとして振り向いた。

蘭が乱れた髪を直しながらそこに立っていた。

「良かった、蘭！さ、メイクやり直して、スタンバイして！」

何だか蘭の様子がいつもと違ったが、開演まで残り一五分ほどしかなく、園子は慌てて蘭を目行く担当の所へ行かせた。

やがて、幕が上がり、劇が始まった。

多少の練習のかがあつてか、新一の口調も先程より滑らかだった。
仏頂面はそのままだったが。

そしていよいよ、一番の見せ場のシーン。

王子がパーティー会場で見つけた、姫の声を使った魔女に求婚をし
かける場面。

『君があの中の姫君…！？ようやく会えた！その声、間違いない！
私の気持ちを受け取ってくれるなら、あの時口ずさんでいた曲を、
どうかもう一度歌ってはくれないだろうか…』

魔女役の志保が妖しく笑った。

見るものをゾツとさせるような、冷たい微笑みだった。

「あれは…素よね？」

思わず園子は漏らした。

再び姫の心の声が響く。

『違います、王子様！あの方は私ではありません。でもなぜ、あの方
は私の声をしているの？このままでは、私の気持ちが届く前に、
私は泡となり、消えてしまう！』

「…蘭？」

舞台袖でそつと見守っていたクラスメイト達が、蘭の様子に気付いた。

ここで蘭は、絶望のあまり泣き崩れる演技をするはずだった。

しかし、彼女はつかつかと新一に歩み寄っている。

「何やる気…？」

蘭は新一の前までくると、立ち止まった。

だが何も起きない。

観客達が騒ぎ出した。

「い、一旦幕下ろそうか？」

戸惑ったクラスメイトの一人が言ったが、園子が制した。

「待つて！…もう少し、このまま」

蘭はまだ新一を睨みつけていた。

すると、蘭の手が少し動いた。

皆が息を飲んで見守る中、舞台上でパンという音が響いた。

蘭が新一の頬を叩いたのだ。

「ら、蘭、何やってんの？」

「こんなの台本にないよ」

「工藤くん大丈夫？」

女子たちからそんな声が上がったが、男子達は面白そうに見ている。

『あなたの愛はそんなものでしたか、王子さま。例え声は同じでも、その方は偽物。本物と偽物の区別もつかぬのですか』

声は出ない設定のはずの姫が話している。

会場が混乱に陥った。

『に、偽物？どういう意味でしょうか？』

新一はどうやら展開についていけないらしく、目を泳がせながら必死に言葉を考えている。

「誰か、ペン貸して！」

園子は紙を手にとると、その上に何かを書き、それを舞台に向かって見せた。

こちら側を向いている新一と志保には見えたらしく、微かに頷いた。

『いきなり人の頬をぶつなんて、野蛮な娘ですこと。こんな娘は放つておいて、私達だけでお話をしませんか、王子様？』

志保は自分の声でそう言った。

当然、今までの志保の声は、あらかじめ録音しておいたはずの蘭の声。

『き、君：今の声は、一体何だ？君は、私を救ってくれた、あの姫君ではないのか！？』

『な…こ、この小娘！お前のせいで、せつかくの呪文が台無しだわ！』

これらはすべて、台本には載っていない。

「どうなってんの…？」

クラスメイト達は困惑したように園子を見た。

「私が指示したの。このまま続けて！って」

「でも、もう滅茶苦茶だよ？」

「大丈夫よ！」

舞台では、蘭抜きでの演技が続いている。

『どうやら、この娘の愛が大きすぎるが故、私の呪術もきかなかったのね…。仕方ないわ。今回は私が諦めましょう』

志保は黒いマントを翻し、舞台を降りた。

『結局、君が私が探していた姫君だったのか！それに気付かず、私はなんとという愚かなことを…！』

新一は蘭に向き直り、続けた。

『私は確かに、間違いを犯した。だが、私の願いはただ一つ。君の傍にいたい。私は君の傍にいられるだけで、十分に幸せなんだ』

台本にはなかったセリフ。

蘭はしばらくの間、驚いたように新一を見ていた。

『…あなたは私として、本当にお幸せなんですか？』

蚊の鳴くような声で囁く。

『君がいなければ、私には幸せなどない。永遠に不幸なのだから。これは私の我儘だが、どうか私の傍に、いてほしい』

その後、二人がどうなったかは誰も知らない。

すぐに幕が降り、ライトも消え、舞台は二人っきりの空間。

人魚は泡とならず、永遠に王子の傍にすることを、誓ったとさ。

めでたし、めでたし…。

…かな？

マーメイド（後書き）

二週間ぶりの投稿！

駄文ですみません（汗）

リクエスト受付中

次回も見てください

光（前書き）

哀新

初です！

光

ねえ、工藤くん。

あなたが元の身体に戻って、何年経ったのかしら？

私はもうすぐ、高校生よ。

吉田さんや、小嶋くん、円谷くんも一緒。

あなたがいなくなってからしばらくの間、落ち込んでいた彼らも、
今ではすっかり大人になってるわ。

みんな、変わったのよね。

あなたも、探偵事務所の彼女と結婚して、幸せそうに暮らしている
もの。

最近じゃ、あなたそっくりの顔をした小さな子が、あなたの家から
元気よく出てくるのを見かけるわ。

変わっていないのは、私だけなのね…。

あなたがいなくなった時から、私の時間は止まったまま。

体だけ成長して、心は置いてきぼり。

そんなことを言ったら、あなたはきっと、笑うでしょうね。

月日が経っても変わることのない、あの笑顔で。

私が思わず素顔を見せそうになる、あのキラキラした表情で。

知ってた？工藤くん。

私、あなたが好きよ…。

今さら遅いでしょうけど、心の中で言うぐらい、許してくれるわよね？

組織を抜け出したばかりの頃、あなたは私の一筋の光だった。

あなたと一緒になら、彼らに立ち向かえるかもしれない、って。

それぐらい、私にとってあなたは大きな存在だった。

あなたと事件を解決できて、あなたに相棒と呼ばれて、私は幸せだったわ。

初めて、人の役にたてた気がして。

真っ黒な過去が、浄化されていく気がして。

私はまだ、真っ白ではない。

あなたの愛しい人とは、真逆。

嫉妬してた。

明るさも優しさも、友だちも好きな人もすべて持っている彼女に。

でも、恨むことは、できなかった。

お姉ちゃんに重ねていた、ってこともあるけれど、やっぱり一番は、あなたが愛している人だから…。

彼女が素晴らしい人だということは、私だって知ってるわ。

でもあなたなら、“お前だって、いいところあるぜ？”って言うてくれるかしら？

私がそれって何？と聞いたら、きっと口籠るでしょうけど。

そんなあなたでも、私は好きなのよ。

他に好きな人ができたとしても、あなたのことは、ずっと忘れないわ。

もう“江戸川コナン”は、もう存在しない。

それでも私は、あなたが好き。

姿は変わっても、あなたはあなた。

あなたは一生、私の光。

光（後書き）

相変わらずの意味不明っぷり、申しわけございません（――）

次回もよろしく願います

リクエストも募集中！

ジェラシーパニック 2 (前書き)

星野由香里様リクエスト

平和

ジェラシーパニック 2

鏡の前に立って、もう一度自分の姿を確認する。

今日のリボンはいつもと違い、淡いピンク色。

彼は気付くだろうか。

…いや、期待はしないでおう。

「これでええやるか…」

和葉は呟きながら、リボンの位置を確かめた。

今は何時だろうと、時計に目を向けた。

「ア、アカン！もうこんな時間！」

約束まで、残り三〇分しかない。

彼のことだ。

和葉が遅れてきたら、ここぞとばかりに嫌味を言っだろう。

結局、たいして見なおすことができぬまま、家を飛び出した。

和葉は息をついた。

「ま…間にあつたわ…」

膝に手をつきながら辺りを見渡した。

しかし、彼はまだ着いていない。

携帯を開くと、そろそろ来てもおかしくない時間にはなっている。

「平次、何してんのやる…」

ためしに一度電話をかけてみる。

だが…出ない。

まさか、事件？

思わず手にグツと力が入ったが、堪えた。

この間のプロポーズ以来、全くと言っていいほど、彼はその話を持ち出さない。

それどころか、滅多に顔もあわせない。

そんな中デートに誘ってくれたのだから、これも少しの進歩なのか

もしない。

今日はゆっくり待つとしようか。

和葉はベンチに腰を下ろすと、バッグの中から指輪を取り出した。

この前のデートで平次からもらったものだ。

それを左手の薬指にはめてみて、思わず笑った。

サイズがぶかぶかだ。

きつと何号かわからず、慌てて自分よりいくつか小さいものを買ったのだらう。

平次が一人で宝石店に入って、指輪相手ににらめっこをしている様子を浮かべると、なんだか微笑ましくもある。

そうしていて、何分が経っただらう。

約束の時間は過ぎた。

今日はバイクだから、待ち合わせはこの公園であっているはず。

なのに…遅い。

もう一度電話を試してみようかと思っていたが、公園の入口の方から、聞き覚えのある声がした。

「平次？」

立ち上がってその方を見た。

しかし、見ない方が良かったのかもしれない。

彼女の顔に、青筋がたった。

「こちらにもサインくれます?」

「あつ、あたしにも!」

「うちが先や!」

「早いもん勝ちやろ」

キヤーキヤーと甲高い声をあげている女の子たちの中心にいるのは、間違いなく彼だった。

近づこうにも、ファンが多すぎて近づけない。

「お、押さんでもええやろ。ちょっと待ってや」

平次がへらへらとしながら、女の子たちを相手している。

それが更に、和葉の怒りを煽る。

やがてファンが消え、平次は和葉のもとへ来た。

「遅れてすまん!途中で捕まってもうて」

「知つとる」

「…な、なんか怒つとるんか?

「別に」

そう和葉が言うと、平次はホッとしたような顔になる。

「それやったら、何ブスツとした顔してんねん？」

「せやねえ…。こんな色黒男に何分も待たされた挙句、他の女とへらへらしとったことなんて…」

グイッと耳を引っ張った。

平次が痛そうに顔をしかめた。

「全っ然、気になんかしてへんわ!!」

そう耳元で怒鳴ると、和葉は指輪をはずした。

「返す」

「は？か、和葉？」

「ほな、さいなら」

「ちっ、ちょお待てや！」

平次が何か騒いでいたが、和葉は気にも留めず、どすどすと公園を出ようとした。

「待てって言うてるやろ！」

「知らん！」

「和葉！」

傍から見れば、滑稽な様子だろう。

関西では有名な探偵が、女の子に振られて必死に追いかけている。

先ほどのファンが見ていれば、幻滅するかもしれない。

だが、そんなことを考えていても、余計に苛々するだけだった。

和葉はスピードをあげた。

負けじと平次も足を速める。

「ついてくんな、アホ！」

「アホはどつちや、ボケ！」

「アンタにアホともボケとも言われたない！」

「知るかい、そんなん！」

めちやくちゃにお互い怒鳴りあつて、しまいには相手が何を言うてるのかもわからなくなってきた。

「お前は昔っからそうや！理由は言わんでいきなりキレだしよって……」

「さっきの女の子の所、戻ったらええやろ！」

言っているうちに、言葉が素直になっていくのがわかる。

そう。ぶつかろう。

素直な気持ちのままで。

「大体なあ、お前みたいなアホ、オレぐらいしか相手にせえへんのやから……」

「アンタみたいな男、あたしぐらいしか面倒見きれへんのやから……」

「ごめん」
「すまん」

.....

嫉妬と素直は、違うようで、実は近い。

好きじゃなければ、嫉妬はしない。

嫉妬しなければ、好きじゃない。

さ、素直になろう。

ありのままの姿で。

勇者？ 2（前書き）

オリキャラ
須藤光輝再び！！

果たして、今回のお相手は？

勇者？ 2

「好きです！」

「遠慮しておくわ」

告白から振られるまでの時間、およそ0.36秒。

記録更新！

…と、いけないいけない！

「あ、あのう、オレのどこがそんなにダメ…」

「しつこい所かしら」

ガン！

ダメージ+2000！！

「それじゃ、私帰るわ」

「えっ？み、宮野？」

クールに告げてから背を向ける彼女を、光輝は未練たっぷりに見つめた。

これで何度目になるだろうか。

謎の美人転校生に一目惚れをし、以来こうしてアタックを続けるも、全く靡いてくれない。

それどころか、いつも冷たく振られるばかり。

まさか…これが所謂、ツンデレか!?

「なるほど…」

一人納得していると、後ろから肩をポンと叩かれた。

「うわっ!？」

「何かなるほどだよ？」

「兄貴!」

新一は頬をピクリと痙攣させた。

「誰が兄貴だよ」

「いいじゃないすか。オレ、弟子っすから!」

光輝は満面の笑みで答える。

「んなの許可した覚えはねーよ」

「それより兄貴!確か、あの転校生と仲良かったんですよ?」

話を聞いていない光輝に、新一は少し青筋をたてた。

「宮野のことか？」

「はい!宮野志保です!」

目を輝かせる光輝。

しかし反対に、新一は呆れた顔を向けてきた。

「お前…宮野に惚れてんのか？」

「あつ。ばれました？」

光輝は締りのない表情を見せた。

「アイツはやめとけ。おまえの手には負えねえよ」

「どういう意味すか？」

「…ま、頑張れよ」

「ちよつと兄貴い！アドバイスくださいよー！」

だが、新一は何も言わずにその場を離れた。

しばらくの間、光輝はきょとした目でその方を見つめていた。

放課後、光輝はとぼとぼと帰路についていた。

工藤新一の彼女、毛利蘭に惚れていた時は、まだ良かったかもしれない。

彼氏がいるし、自分を振った理由がはっきりとわかっていた。

しかし、宮野志保の場合はどうだろう。

彼女には恋人はいないはず。

あれだけの美貌の持ち主で、なぜ作らないのだろうか。

そして、いないのなら、なぜ自分を振ったのか！？

「だぁーっっ！！わっかんねえ！」

光輝は苛々としながら、髪をぐしゃつとさせた。

いつの間にか日はとうにくれ、近くの家から美味しそうな匂いが漂ってきた。

晩飯なんだろ…。

そう思った途端、腹が鳴った。

光輝の家までは、まだ二十分はかかる。

それまでにもつか…。

「あれ？須藤くん？」

今日はうしろから声をかけられることが多いらしい。

光輝は再び、飛び上がった。

「そ、そんなにびっくりした…？」

「も、毛利か…」

蘭は少し傷ついたような顔をした。

「いや、そういうわけじゃねえんだけど…」

「そう？ならよかった」

蘭はニコツと笑う。

この笑顔に、数週間前の自分は夢中だった。

しかし今は…。

「はぁ…」

「どうしたの？」

「なぁ。毛利も確か、宮野と仲良かったよな？」

「う、うん…」

光輝は藁にもすがる思いで、蘭の手を掴んだ。

「オレ、どうしてそんなに宮野に嫌われんだ!？」

「え？」

「オレってそんなダメな男なのか…」

蘭は、急に落ち込みだした光輝を、戸惑った目で見つめた。

「…須藤くん。今日、新一の家来る？」

「いっただつきまーす！」

「現金な奴…」

新一の嫌味っぽい言葉も気にせず、光輝は目の前にある蘭の手料理をがつがつと食べはじめた。

「うつめー!」

「ありがとう」

蘭は嬉しそうに笑った。

新一は面白くなさそうに、自分も料理を口に運ぶ。

「兄貴は幸せもんっすね!いつもこんな飯食ってんだから」

「そ、そうか?」

そう言われると、新一もつい頬を緩ませた。

「うんうん。羨ましいっすね。オレみたいな凡人には、夢のまた夢

…」

光輝の話を遮り、チャイムの音が鳴った。

「客っすか?」

「私出るね。二人とも食べてて」

蘭が立ち上がり、玄関へと向かう。

「お邪魔するわ…」

その声に、光輝は素早い反応を見せた。

「宮野!?!」

志保はスプーンを持ったままの光輝の姿を見ると、眉をひそめた。

「あなた、何やってるの？」

「飯食ってる！」

光輝は思わぬ幸運に、大声をあげた。

「てか、お前こそ何やってんだよ？」

「あら。来ちゃ悪い？」

新一の問いかけに、志保はツンとすまして言った。

「そうは言ってねえだろ」

「さあ。どうかしら」

光輝は呆氣にとられて、二人のやりとりを見つめていた。

よく一緒にいるのは見かけていたが、まさか学校外でも会っていたとは…。

「あとう、兄貴。宮野とは一体…」

恐る恐る聞いてみるが、新一はぶっきらぼうに、隣人とだけ答えた。

「何だ。ご近所っすか！」

光輝はパツと明るくなり、笑い声をあげる。

「で、何の用だよ？」

「博士が何か実験をやってるから出てきたのよ。巻き沿いはごめんだから」

博士？実験？

何だかよくわからないが、これは所謂、奇跡の偶然！！

「そ、それなら、オレとどっか遊びに行こうぜ！近くにカラオケあるし、良かったら兄貴たちも！ね？」

「パス」

勇者の精一杯の誘いは、あっさりと断られた。

「誰かさんの歌声を間近でマイク付きで聞かされるんだったら、博士の実験を手伝った方がましよ」

「おい、誰のことだよ？」

「あなた以外に誰かいるのかしら？」

「…にやろ」

新一と志保のやりとりを、光輝はぼんやりと見つめていた。

志保の瞳の色が、いつもと違うことに、光輝は気付いた。

あれはどこかで見たことがある。

そう…。

いつも自分が、志保に対して向けている瞳だ。

「それじゃ、志保さんも夕食どう？まだだったらの話だけど…」

「ありがとう。いただくわ」

まさか、彼女が…。

光輝は上目遣いで、新一と志保を交互に見た。

「オレって、いつも兄貴には敵わないんだな…」

ボソツと呟く。

「あん？なんか言ったか？」

「や…何でもないっす」

いきなり暗くなった光輝を、新一は気味悪そうに見た。

「何だよ、急に…」

「オレ、もう帰ろっかな…」

光輝は肩を落として、工藤邸を出ようとした。

その時、隣の家から、ドカン！という爆発音が聞こえてきた。

「博士…？」

志保が慌てて光輝を押しつけて、飛び出した。

新一と蘭がそれに続く。

慌てて光輝も追いかけた。

隣の家から、一人の白髪の老人が出てきた。

「博士！」

志保が駆け寄り、咳こむ老人の背中を撫でた。

「何やってんのよ？」

「す、すまんのう、志保くん…。ちょっと、失敗したようじゃ」

どうやら、彼が三人の言う博士らしい。

「ったく。また変なもん作ろうとして…」

「変なもんとは何じゃ。わしの最高傑作じゃぞ！」

博士はそう言っていると、よっこらしよ、と立ち上がる。

「またやり直しせねばならんの…」

「いい加減諦めなさいよ。しつこいわよ」

「しつこくても何でも、わしはこの発明で特許をとって、大金持ちになってやるんじゃ！」

三人が空きた目をする中、博士は高笑いをした。

一方、光輝は目を輝かせていた。

そして、不意に博士の手を握った。

「な、なんじゃ、君は…」

「オレを弟子にして下さい！」

また始まった…。

「オレも諦めの悪いヤツになって見せます！」

いや、十分になってるが…。

「よろしく願います、兄貴！」

勇者はもはや、誰でもいいらしい。

P i n c h Ⅱ L o v e (前書き)

星野由香里様リクエスト

大学生新蘭

P i n c h 〃 L o v e

「何よ、新一の馬鹿！」

「んだと!？」

「大っ嫌い！」

いきなりこんな出だしで恐縮である。

ただ、今はそつとしておいてほしい。

ここで何か口出ししようなものなら、この二人は余計に素直にならない。

とりあえず今は、陰から見守っておこう。

ほら、ここにも、そこにも、見て見ぬふりをする友人たちがちらほらと…。

大学のキャンパス内でこんな大喧嘩をできるカップルは、この二人ぐらいしかないだろう。

関わりと面倒だ。

そう言いたげな様子で皆そそくさと去っていく。

そんな中、一人の少女が彼女に近づいた。

「蘭。終わった？」

「何よ園子」

「今日も派手にやったわね」

「あの推理オタクが悪いのよ!」

蘭は不機嫌に答える。

「はいはい。それじゃ、今日は旦那のことは忘れて、合コンでも行きましようか」

園子は蘭の肩に手を回すと、ニヤツと笑う。

「何でそうなるのよ」

「いいじゃない。たまには自由になんなきゃ」

「…京極さんは?」

蘭に聞かれると、園子は言葉に詰まった様子でうつむいた。

「だって最近連絡くれないんだもん!ちょっとぐらい不安にさせなきゃダメよ」

「どうやら、お互いに恋人とはうまくいってないらしい。」

「こうなったら、合コンでいい男と写真撮って、それ送りつけてやりましようよ!」

「はあ!?!なんで私まで…!」

「それ見たら新一くんだって…“ああ、オレが悪かった。蘭、今すぐに帰ってきてくれ!”って言うでしょ」

「い、言わないと思うけど…」

というわけで…無理やり、蘭は合コンへ参加させられることとなっ

た。

ここに仏頂面の少女が一人。

無論、蘭だった。

強制的に合コンへ連れてこられた挙句、自分の向かいにいるのは…。

「おい」

「…話しかけないで」

蘭は新一から顔を逸らす。

「怒ってんのか？」

「べつつにい」

新一はため息をついた。

「つーか、こんな所で何やってんだよ」

「それはこっちのセリフよ！私と喧嘩したから、可愛い女の子とお近づきになろうとでもしたわけ？」

「なわけねえだろ！」

「じゃあんだこそ何でこんな所にいんのよ！」

「お、オレは無理矢理…」

新一の歯切れが悪くなる。

「もういいわよ！」

つい怒鳴って、目の前のグラスを煽った。

「おつ。その子いい飲みっぷり！」

「いいねえ。飲める女の子って」

男子達が蘭を見て、拍手を送っている。

しかし、蘭は無反応で手をあげ、おかわり！と叫んだ。

「ら、蘭。それぐらいに…」

「うるさい！ほっといて！」

えー…。

危険な匂いがするので、いい加減私も帰りたいのですが…。

え？

ダメ？

…仕方ない。

あっという間に、蘭の前には空きのグラスが三本、四本…。

へべれけ蘭、ここに誕生！

…と、つい遊んでしまった。

申し訳ない。

「ら、らん。大丈夫？」

園子が心配そうに声をかけたが、蘭は気にせず新しいのを注文している。

「の、飲みすぎだって」

「今日はとことん飲むの！あらしのことはほっといれ！」

呂律も回っていない。

…危険だ。

非常に危険だ。

私も逃げたい。

しかし…

語り手として、それはできない！！！！

「もう帰った方がいいよ」

「何よ、はくじょーものオ」

園子は新一に視線を向けた。

「…ほら、帰んぞ」

新一は蘭の腕をひいて立たせた。

だが、蘭はその手を振り払った。

「新一のばーか！」

「今はそういうこと言ってる場合じゃ…」

「一緒になんか帰らないもん。新一なんか嫌いだもん」

「…嫌いでも何でも、帰るんだよ」

そう言うと、新一は蘭の手を引っ張ってその場から去っていった。

さて、私も語り手として、追いかねば。

「新一の推理オタケー！」

「へいへい」

「ホームズ馬鹿あ」

「…へいへい」

「推理馬鹿王子」

「……………」

新一が黙ると、蘭は新一の頬をつねった。

「いてっ。何だよ？」

「やーい。ざまーみろ」

酒の所為か、蘭は大声で笑った。

すっかり子供のようになっちゃまっている。

酒なんか飲ますんじゃないった…。

新一が後悔していると、蘭が突然立ち止った。

「私はまだ怒ってるからねー」

「わかりましたよ…すみません」

「心がこもってないーい！」

「…ごめんなさい」

新一が頭を下げると、蘭はまた大声で笑った。

「ほんとに悪いと思ってんのかぁ？」

「思ってます」

「じゃーねえ…」

蘭は急にいたずらっ子のような目になる。

新一は嫌な予感がした。

「キスして？」

「…はあ！？」

「嫌なの？じゃあいいもーん」

「そ、そうじゃねえって」

とは言うものの、ここは人通りが多い。

「ここじゃなきゃダメか？」

「だめー！」

周りを見回す。

しかし、やはり人が多く、こんな所では…。

「やっぱり新一なんか嫌い」

「ま、待て待て待て！」

新一は歩き出そうとする蘭を引き留める。

そのまま腕を引き寄せて…。

一瞬だけ唇を合わせた。

周囲にいた人々が、こちらを見た。

新一は顔を赤くさせたが、蘭はなぜか、苦しそうな表情。

「ら…蘭？」

「新一い…」

ま、まだ何か気に入らないことでも…。

「な、何？」

「…吐きそう」

「えっ？」

とりあえずここまでにしておきましょうか…。

P i n c h = L o v e (後書き)

今回はおふざけが過ぎました。

どうも、すみません>(_ _)<

感想、リクエスト、お待ちしてます

B y 語り手(*^ _ ^*)

White Love (前書き)

本日はクリスマス！

新蘭

White Love

十二月二十五日。

キリスト教徒が少ない日本でも、それは大切な日。

特に、世の中の恋人にとっては…。

しかし、中には例外もいるようだ。

「ねえ新一！。クリスマスなのに、事件？」

一人の少女が、お玉を片手に口を尖らせた。

「しゃーねえだろ。事件は年中無休で起きんだからよ」

対して青年は、冷めた口調で返している。

「…プレゼントとかは？」

「あん？」

「ないわけ？私はちゃんとおげたじゃない！」

「ああ…あの見た目が丸焦げのレモンパイな」

それを聞くと、蘭は頬を紅潮させた。

「何よ、人がせっかく作ったのに！新一の馬鹿！事件にさっさと行つちやえー！」

「言われなくても行きますよ」

新一はさつさと靴をはくと、玄関を出た。

蘭はしばらく息を荒くしていたが、急にぺたつと座り込んだ。

「新一の馬鹿……」

二人で過ごす初めてのクリスマスになるはずだった。

今日のために、これからケーキを焼く予定だったのに。

それが結局は事件で潰れる。

しかも……あんなに素っ気ない態度で……。

「もういいわよ！新一なんか知らない！」

携帯を取り出すと、親友の電話番号を表示した。

こうなったら今日は、ずっと遊び歩いてやる！

やけくそな気持ちで電話をかけると、思いのほか彼女はすぐに出た。

『はい？』

「あ、園子？私」

『どうしたのよ。今日は新一くんとおデートじゃないの？』

園子がからかうように言ってきたが、蘭は違う！と大声を出した。

『な、何よ。そんなに叫ぶことないでしょ……』

「う、ごめん…」

『はっはーん。さては喧嘩したな?』

「…まあ」

蘭は俯いた。

気配を察したのか、園子は明るい声をかけてくる。

『で、何? 私に愚痴を聞けって?』

「そういうんじゃないんだけど…。ね、これから暇?」

蘭がたずねると、少し沈黙があってから、園子はごめんと言った。

『久しぶりに真さんが帰ってくるんだ。だから、今日は一日デート

…かな』

「そ…そっか。楽しんできてね」

『うん…。なんか、悪いね。今度遊ぼう』

本当に申し訳なさそうに言う園子に、蘭は笑った。

「いいよ別に。急に電話かけた私も悪いし。それじゃ、また今度ね」

そう言うってから、電話を切った。

思わずため息が出てきた。

ケーキの材料、買ってきたやつたっけ…。

無駄になっちゃったな。

レモンパイは失敗するし、新一は帰って来ないし。

最悪のクリスマス。

「新一の馬鹿：馬鹿馬鹿馬鹿ー！！」

ここが新一の家であるということも忘れ、ひたすら馬鹿と言いつける。

それでも、気分は全くスッキリしない。

蘭はテーブルの上に置いてある、ケーキの材料を見た。

こうなったら…一人で作って、やけ食いしてやる！

がたっと立ち上がると、蘭は材料を手にキッチンに立った。

最初は生地づくり。

メレンゲを作ろうと卵を割ったが、力を入れすぎて、白身と黄身が混ざってしまった。

「あ…どうしょ。黄身はいつたら固まんないし」

仕方なく、もう一個新しいのを取り出したが、またしても失敗。

それを繰り返していくうちに、段々といらついてくる。

「何なのよ何なのよ何なのよー！！」

ついに十個目の卵もダメにした。

「私が悪いってわけ…」

拳にグツと力が入る。

気力がなくなってきた、蘭はふらふらと近くの椅子に腰かけた。

目線の先には、卵でぐちゃぐちゃになったキッチン。

しかし、それを片づける気にもなれない。

再びため息をつく、テーブルに突っ伏した。

そして、そのまま眠りの世界へと落ちていった。

「おい…蘭、蘭！」

「ん…」

体を揺すぶられ、蘭は目を開けた。

「こんなところで寝てたら風邪ひくだろ」

新一はそう言っ、自分のコートを着せた。

「あれ…いつの間に帰ってきたの…？」

「今だよ。どっかの誰かが、クリスマスに一人で寂しがってんじやねーかなと思ってよ」

皮肉っぽい言い方。

だが今の新一は、間違いなく蘭を心配している。

「じ、事件は…？」

「片づけてきた。でも、お前は片づけてねーみてえだな」

新一はキッチンを眺めた。

「あ…」

思えば、キッチンはそのままだ。

「何だよ、この卵」

ボウルにはいった卵を見て、新一は呆れたように言った。

「だ、だって…」

「…ケーキか？」

「…うん」

蘭が頷くと、新一は苦笑した。

「珍しいな、お前がこんな失敗するなんてよ」

「それは新一が…」

「オレが？」

冷たくするから…。

「…ほらよ」

不意に、新一は俯く蘭の目の前に、一つの箱を差し出した。

「こんなところだろうと思ったぜ。買つという正解だな」

「ケ…ケーキ？」

白い箱には、確かにイチゴのたくさん載ったショートケーキ。

蘭は呆気にとられてそれを見つめた。

「買ってきてくれたの？」

「まあな」

新一は頬をかいいた。

「あの…ありがとう」

小さい声で、蘭は囁いた。

新一には聞こえなかったらしく、なんだよと聞き返した。

「な…何でもない」

「はあ？」

「元はといえば、新一のせいなんだもん」

「かわいくねー…」

「何よ！」

始まる口喧嘩。

だがそれは、二人にとって仲直りの証拠。

お互いに笑い合つと、よしと新一は言った。

「それなら、乾杯でもすつか？」

「あ、ご馳走！作ってない」

蘭が言うと、新一はまた笑った。

「だったら、買いに行くか？一緒に」

「…うん！」

二人はぎゅっと手を握った。

外ではいつの間にやら、雪が降りはじめていた。

「ホワイトクリスマスね…」

「だな」

雪が降るほどの気温の中、大して寒さを感じない二人だった。

繋がれていた手は、何よりも暖かい。

White Love (後書き)

それでは皆様、メリークリスマス！

私はメレンゲ失敗しないようにしなくては… (< _ >)

羽根つき(前書き)

A Happy New Year !!!

新年最初のお話はこちら！

羽根つき

今日はどこの家でも盛り上がった様子が見て取れる。

それもそのはず。

今日、一月一日は、日本にとっては最大のイベント。

「あけましておめでとうございます」

元旦だ。

ここ工藤邸でも、新年の挨拶が行われている。

「素敵な振り袖ね」

「まあね」

振り袖で派手目に着飾った母親を、少年は呆れた目で見ていた。

子供にとっては、この新年最初の行事は、少々堅苦しいかもしれない。

「有希ちゃん、あけましておめでとう」

やがて、眼鏡をかけた女性が有希子のもとへ来た。

「おめでとう、英理」

「新一君もおめでとう」

新一はさつと母親の陰に隠れた。

有希子と英理は、互いに顔を見合せて笑った。

「新ちゃん、ご挨拶ぐらいしなさい」

「…こんにちは」

新一はぶつきらばうに返すと、そのまま父親の方へ行った。

「どうも新一君は、私のことが苦手みたいね」

「気のせいよ、きっと」

有希子は笑いながら英理の肩を軽く叩いた。

すると、後ろからやはり振り袖を着た小さな女の子が見えた。

「あらあ、蘭ちゃん、あけましておめでとつ。可愛い振り袖ね」

蘭はニコツと笑って、「おめでとつございます」と言った。

「蘭ちゃんはしっかりしてるわ。うちの息子とは大違いね」

有希子はそう言つと、お年玉に夢中になっている新一に目をやった。

新一もそれに気づいたらしく、こちらに目を向けた。

蘭の姿に目を止めると、手を振ってきた。

「らーん。ちょっと来いよ」

蘭は英理を見上げた。

「いってきなさい」

「新ちゃんをよろしくね」

蘭は嬉しそうに笑うと、新一の方へ走っていった。

「新一、あけましておめでとう」

「おう」

新一が短く返すと、蘭はむっとした顔になる。

「ちゃんと挨拶はしなきゃダメでしょ？」

「…おめでと」

「それでよし」

蘭は満足気に言った。

「それより、お年玉もらおうぜ」

「うん。…あれ？新一、何、それ？」

蘭は新一が持っていたものに目を向けた。

「ああ、これか？」

新一は平べったい板のようなものを持って、ニヤツとした。

「羽子板っていうんだぜ。ほら、羽根つきのラケットみたいなもんさ」

「へーえ」

蘭はまじまじと羽子板を見た。

「やってみるか？」

「うん！」

二人は庭に出て、羽根つきを楽しんでいた。

大人たちは穏やかな表情でそれを見守っている。

しかし、まだまだ子供。

遊びにも全力を尽くす。

「それー！」

蘭が勢いよく飛ばした羽根を、新一も負けじと返している。

だが、蘭は振り袖を着ている分、動きにくそうだった。

羽が地面に落ちると、蘭は悔しそうに唇を尖らせた。

それを見て、新一はけらけらと笑った。

「蘭、知ってつか？羽根つきでミスしたら、顔に墨で落書きしてもいいんだぜ？」

「えーっ？」

蘭は不服そうに顔をしかめたが、大人しく新一に墨を塗られていた。

やがて、新一の顔はもとのままに対し、蘭は真っ黒という悲惨な結果…。

「そろそろ終わりにしようぜ」

「やだ！新一に勝つまでやる！」

駄々っ子のようにそう言うと、再び羽子板を構えた。

新一は呆れたようにため息をつく、もう一度羽根を打った。

しかし…

「あー!!」

「え？」

蘭が何やら後ろを指差して声をあげた。

傍にいた全員がそちらを向く。

その隙に…新一の足もとに、羽根がごとつと落ちてきた。

「あ…」

「やったー!!」

「お、おい、卑怯だろ、今の!」

新一は無邪気に喜ぶ蘭に怒鳴ったが、蘭は屈託のない笑顔を浮かべている。

「負けは負けでしょ。はい、座って」

蘭は無理矢理新一を椅子に座らせると、嬉々とした表情で筆を持った。

抵抗もできないまま、新一はジツとしていると、大人たちがクスクス笑っているのが見えた。

「蘭、お前何書いて…」
「でーきた!」

蘭はさつと新一に鏡を渡した。

嫌な予感を抱きながらも、新一はそれを覗いた。

表情が凍りつく。

新一の顔には、可愛らしい文字で『ホームズおたく』と書かれていた。

蘭はそれを見て笑い転げている。

やがて、大人達までもが笑いだすと、新一は顔を真っ赤にさせた。

そして現在…。

「いっくよ」

「らーん。足使ってもいいかー？」

「ダメに決まってるでしょ！」

二人きりの静かな工藤邸に、鮮やかな色の羽根が宙を舞った。

そして今年も…

「あー！！」

「え？」

ことごと地面に羽根が落ちる。

「やーい、ひっかつた〜！」

「だから卑怯だろ！」

「毎年引つ掛かる方が悪いのよ！」

蘭は笑いながら、今年も筆を持つ。

書きながら、クスクスと声を漏らす。

「何書いてんだよ？」

「…内緒！」

蘭はいたずらっ子のような目をした。

「気になんだろ。鏡寄こせて!」

「だーめ!」

ちなみに今年書かれていた文字は…

『好き』

の二文字だったりする。

羽根つき（後書き）

皆さま、あけましておめでとーございます

新年早々、駄文を読んで下さり、ありがとうございました（*^
^*）

今年もどうぞ、コナン大好き娘 u s a と、その小説をよろしく願
いします（――）<

勇者？ 3（前書き）

光輝ちゃんが好きすぎる今日この頃（笑）

勇者？ 3

須藤光輝は途方に暮れていた。

彼は今さっき、女の子に振られたばかりだ。

もったも、これで三十六回目のことではあるが。

さすが勇者。

それでもまだ諦めない。

光輝が一人でとぼとぼ歩いていると、後ろから突然声がかかる。

「あのお、ちょっと道をお聞きしたいんやけど」

光輝が振り返ると、そこには長い髪をリボンでポニーテールにまとめた、少女の姿。

「は、はい！なんすか？」

「毛利探偵事務所ってどこやるか？」

関西風の訛りのある言葉で、彼女はたずねてきた。

「東京の道はややしゅうてな、道に迷ってしもて…」

そういう彼女は、少し恥ずかしそうに笑っている。

「そ、そうなんですか！いやあ、大丈夫っすよ。オレが責任もってご案内しますから！」

「ほんま？おおきに」

懲りるということを知らぬ勇者。

また新たな恋を発見した様子。

光輝はデレデレしながらも、少女の隣に立って、道案内を始めた。

「ここを右に曲がって…二つ目の角を左に。んでもって、それから…」

光輝の言葉に、一つ一つ頷く彼女が、なんとも可愛らしい。

「助かったわ。おおきにな」

「あの、一人っすか？」

道を聞き終えて彼女が立ち去ろうとするのを、光輝は呼びとめた。

「ほんまは連れがおったんやけど、ちょっと別のところ行ってしもてな…。先にあたしは、そこにいかなアカンのや」

「それなら、オレと一緒に行く！」

光輝がノリノリで告げると、彼女は不思議そうな目をした。

「ええの？わざわざ反対方向に回って…」

「いいって。オレ、遠回りが好きな男だから！それとも、行っちゃダメかな？」

「あんたがええなら…」

彼女は名前を、遠山和葉と名乗った。

幼馴染と共に東京の友達の家をたずねたが、途中でその幼馴染とは別行動になってしまったらしい。

「ほんま腹立つ！戻ってきたら、ただじゃおかへんで」

「まあまあ、良いじゃん。おかげでオレらが会えたんだし」

「あんた、面白い人やね」

和葉はクスクスと笑った。

その後も話を続けていたが、和葉の口から出てくるのは、ほとんどが幼馴染のことだった。

「仲良いんだね、その幼馴染と」

光輝が何気なく言うと、和葉は頬を赤らめた。

「それはその…小さい頃からずっと一緒やから、自然とな」

「ふうん」

光輝はふと、この間まで惚れていたある少女を思い浮かべた。

確か彼女の彼氏も、幼馴染だったような…。

「あ、ここや、ここ！」

急に和葉は大声を出した。

いつの間にか、毛利探偵事務所の前まで来ていたらしい。

「それじゃ、ここまでで。氣いつけてな」

「あ、ああ、うん。じゃあね」

名残惜しい気もするが、光輝は和葉に手を振った。

しかし、ここで恋の女神が微笑んだ。

「あれっ、須藤君？」

聞き覚えのある声に、光輝は驚いて振り返った。

「蘭ちゃん！久しぶりやね」

「いらっしやい、和葉ちゃん。服部君は？」

蘭は和葉との再会に顔をほころばせた。

反対に和葉の表情が陰しくなる。

「あの推理ドアホなら、駅の近くでひったくり犯追いかけてったわ」

「そ、そっ。じゃあきつと新一と同じ事件ね」

蘭は苦笑してから、光輝に目を向けた。

「でも須藤君どうしたの？こんな所にいるなんて」

「あ、お、オレは…」

和葉は目を丸くさせた。

「二人知り合いなん？」

「うん。同じ学校だから」

「へえ。偶然つてあるもんやね。さつき道迷つてたら、ここまで案内してくれたんよ」

思わぬ偶然に、二人はキャツキャと笑い合う。

「須藤君も上がってく？これからみんなでお夕飯なんだ」
「いいのか！？」

光輝が夕飯の言葉に飛びつく。

「もちろん。大勢の方が楽しいし。ね、和葉ちゃん」

「せやね。あたしもさっきのお礼せなアカンし」

そう言われると、光輝は緩んだ頬を更に緩ませた。

「オレは別に、当然のことをしたまでだからさ」

とりあえず上がって、と蘭に言われ、光輝は和葉と共に探偵事務所に上がり込む。

「おっちゃんおるん？」

「いるけど、今は事務所よ」

「ほな、挨拶してくるわ。先にいっとつて」

そう言つと、和葉は事務所の方のドアを開けた。

「じゃ、私達家の方に行つてようか」
「あ、ああ」

階段を上る蘭の後ろ姿を見つめながら、光輝はたずねた。

「なあ、毛利。和葉ちゃんのタイプってどんな奴？」

「え？」

蘭は驚いた様子で振り返った。

「須藤君、今度は和葉ちゃんなの？」

「今度ってなんだよ。オレは全ての恋に真剣なんだぞ！」

燃えた目で語る光輝に、蘭は多少引いたようだが、笑顔はまだ辛うじてあった。

「でも和葉ちゃんは無理だと思うなあ」

「何で？」

「だって、和葉ちゃんには…」

少し言いくそくに口ごもる蘭。

そこへ、事務所のドアから和葉が出てくる。

「おっちゃん寝とるわ。なんぼ起こしても起きひん」

呆れたように首を横に振る。

「そ、そっか…あとできつく言つとくから」

蘭は再び苦笑すると、家のドアを開ける。

光輝にとって、女性の家に入ることは久しぶりだ。

たったこれだけで緊張している。

「新一達遅いなあ…」

「まだ犯人追っかけとんのかな」

その会話に、光輝は反応した。

「えっ？兄貴来るのか？」

「あ、兄貴…？」

和葉がきよとんとすると、蘭が色々あってね、と囁いた。

しかし、名探偵というものは遅く登場するもの…。

二十分、三十分と経っても、なかなか来る気配がない。

蘭と和葉の顔に、徐々に苛立ちの色が見えはじめる。

その中で光輝一人が、ややハイテンションで喋っていた。

やがて、和葉がしびれを切らして携帯を取り出したところで、チャイムが鳴った。

「おっ、兄貴か？」

光輝が身を乗り出す。

「ちょっと行ってくるね」

そう言う蘭の表情も嬉しそうだった。

しばらくすると、蘭のほかに、二人の青年の声が聞こえてきた。

一人が新一であることをわかる。

しかし、もう一人には聞き覚えがなく、関西訛りがあった。

まさか…

「平次！あんた遅すぎるで！」

「じゃかあしい！！オレやのうて、工藤が遅いんや！」

蘭と新一の後ろから現れた、色黒の肌に野球帽をかぶった青年。

その青年は、着いて早々、和葉と口論を始めた。

「お前、何してんだよ…」

「兄貴、お疲れさんです」

新一がうんざり顔で光輝を見ると、光輝はふざけて敬礼をした。

「何でお前がここにいんだよ」

「運命のいたずらってヤツですかね」

光輝の返事に、いまいちよくわからないという表情をしている新一。

蘭がこそつと耳元で何かを囁いた。

「なるほどな…」

「何がすすか？」

「何でもねえよ」

口論が一通り終わると、色黒の青年、平次がようやく光輝に気付いた。

「見掛けん顔やな。誰やったつけ？」

「オレは須藤光輝！工藤兄貴の一番弟子です！」

平次は怪訝な顔になると、新一を見た。

新一は声には出さずに、放っておけと言った。

だが、ここで和葉が、いらぬ言葉を放ってしまった。

「須藤君はな、さっきあたしをここまで案内してくれたんよ」

平次の眉間に皺が寄った。

「ほお、案内な…そらおおきに」

「ど、どうも」

「んで、どうなんや？」

「は？」

「せやから…」

平次の顔がズイツと光輝に近寄る。

「アイツに手え出してないんかって聞いとんねん」

「あ、アイツ…？」

「あそこで間抜け面しながら、馬の尻尾ふつとる女のことや」

和葉を指差しつつ、小声でたずねる。

「や、オレはそんなことは…」

「…ホンマやろな、それ」

「も、もちろん」

光輝が何度も頷くと、平次はようやく光輝から離れた。

「あ、兄貴、あの人一体…」

「気をつける。アイツ自分じゃわかってねえけど、やきもちだけは半端じゃねえから」

新一が呆れた目で平次を見ていた。

「毛利…まさか、和葉ちゃんは無理っていうのはさ…」

「あの二人、この間から付き合いはじめたらしくて…」

蘭の言葉に、光輝はがっくりと肩を落とす。

探偵に関しては、なぜか運がないらしい。

だが、光輝はふと顔をあげた。

「決めた！」

そう大声をあげると、光輝は大胆で平次に近付いた。

「な、なんや」

平次がたじろいでいると、光輝は平次の手をガシッと掴んだ。

「オレ、あんたの弟子になります！」

「…はあ！？何言つとんねん？」

平次が混乱したように怒鳴る。

新一と蘭は顔を見合わせて、また始まった、と呟いた。

「オレも探偵になってもてたいんです！」

そう言う光輝は、やや半泣き。

「まずオレ、日サロ行ってやいてきます！」

「アホ！オレの色黒はじっちゃん譲りや！」

勇者はまず、形から入るタイプらしい。

勇者？ 3（後書き）

何故か最近、光輝ちゃんが好きだったりします（笑）

何度同じことを繰り返しても決して諦めぬ勇者、光輝…。

私は奴に、幸福を与えない（^w^）

感想・評価、そしてリクエストもお待ちします

T h e m a g i c ! ! (前 書 き)

星野由香里様リクエスト

快青です。

The magic!!

女の子にとって、クローゼットは戦場だ。

どんなに素敵な洋服がさげられていても、すぐに床に山ができ、しまいに服の山で遭難…。

今まさに、青子もそんな状況だった。

これにしようか、それともこれ、いやいや、そっちの方が…。

そうこうしているうちに、セーターやらカーディガンやらワンピースやらジーンズやらで、あっという間に部屋が埋め尽くされた。

それでも、青子はクローゼットに更に手を伸ばす。

奥の方を引っかきまわして、大量の服を降り出すと、一つ一つを鏡の前で確認。

周りは嵐が通過しているかのような状態にもかかわらず、青子の表情は明るい。

明日は待ちに待ったデートだ。

どんな格好をしていこうか。

考えるだけで、ワクワクしてくる。

思わず鼻歌を歌っていると、それに合わせたかのように携帯の着メロが鳴った。

画面に表示された名前を見て、青子はどきりとした。

たった今考えていた人からのメール。

なんだろう。

慌ただしく携帯を操作して、メールを開いた。

そこには、絵文字も何もない素っ気ない文章でこう書かれていた。

『悪い。明日行けなくなった 快斗』

この冷たいメールに、いきなりのキャンセル。

ついムツとしてメールを睨むが、まさかメールが謝ってくれるわけでもあるまい。

ベッドの上に携帯を放り出し、ため息をついた。

「明日は青子の誕生日なのに…」

高校最後の誕生日。

去年の誕生日の倍も楽しませてやるって言ったくせに。

快斗の嘘つき…。

思えば、最近の快斗はどこか冷たかった。

学校にいても、あまり目を合わせてくれないし。

帰りも一人でさっさと帰ることが多くなった。

それよりも何よりも、マジックの練習量がうんと増えた。

マジシャンになりたいという夢は立派だが、ここまで熱心だと、少し妬けてしまう。

マジックに嫉妬なんておかしいかもしれないが、そう思ってしまうぐらい、今の快斗はそっちに夢中だった。

「いいもん。また恵子達に祝ってもらうもん」

一人つぶやきながら、青子は部屋を見渡した。

すっかり荒れた様子に、再びため息をついた。

去年と同じように、青子の家に友だちが集まり、誕生日パーティーが始まった。

友だちはそれなりに盛り上がっているものの、青子の顔はどこか暗い。

「青子？どうした？」

恵子が不安になってたずねたが、青子はすぐに笑顔になって、何でもないよと言った。

しかし、いつものような満面の笑みではない。

すると、友だちが呑気に言った。

「今年も来なかったね、快斗君」

「うん。楽しみにしてたんだけどなあ、マジック」

「ちょっと！」

一人が注意すると、友だちはそろって会話を止めた。

「き、気にしないでよ。バカいとかいなくなたって、青子はこの通り元気だし……」

青子は気まずい雰囲気を自分のせいと感じたのか、両手を振って明るさをアピールした。

「でも青子、快斗君と出かける約束してたんでしょ？」

「…うん」

「どうしちゃったんだろうね。ここんとこ、ずっとマジックの練習ばかりやってるみたいだし」

全員が押し黙る。

長い沈黙の後、青子はポツッと漏らした。

「快斗、青子に飽きちゃったのかもね」

「なんで？」

「だって、最近ほんとに冷たいし…。もしかして、他に好きな人でも…」

そう言いかけた青子を遮るようにして、外で大きな物音がした。

「なっ、何？」

驚いて立ち上がり、カーテンを開けた。

すると、信じられないような光景が目飛び込んできた。

「わぁ…」

「綺麗…」

「さっすが快斗君！」

「何よ。しっかり愛されてんじゃない」

友達が口々に言うが、青子は答えない。

目の前の光景を、呆気にとられて見つめている。

やがて、その目に涙が溜まってきた。

「わっ、あ、青子。どうした？」

「何でもない…大丈夫」

そう言うってから涙を拭う。

その間も、外ではイルミネーションがちかちかと光っている。

ビルというビルに、言葉が記されていたからだ。

『Happy Birthday Aoko』

連なるビルを利用した、光のマジックだった。

「すごいね…」

言葉も失うほどの美しさに、皆が見惚れていると、不意に部屋の電気が消えた。

「て、停電？」

慌てていると、すぐ近くで聞きなれた声がした。

「ショーはこれからだぜ」

驚く暇もなく、部屋が一瞬で明るくなった。

しかし、電気がついたのではない。

部屋の中で、何十本もの蝋燭に火が灯ったのだ。

もちろん、つい先程までそんなものはなかったにもかかわらず。

「快斗…？」

そっと呼びかけると、すぐ隣からポンと肩を叩かれた。

「誕生日おめでとう、青子」

振り向くと、そこにはいたずらっ子のような目をして笑っている、愛しのマジシヤンの姿。

「な、なんでここに…」

「約束したろ。去年の倍も楽しませてやるって」

そう言うと、快斗は背中に隠し持っていたものを差し出した。

「これ、やるよ」

青子は手を伸ばし、それを受け取った。

「何？これ」

「あとのお楽しみ」

快斗は面白そうに笑った。

そして、青子の髪を軽く撫でた。

快斗がいる。

当たり前だけど、そう思った。

青子は知らず知らずのうちに、元の笑顔になっていた。

「にしても、よくこんな大掛かりなマジックできたねえ」

恵子が呆れ口調で言うと、他の友達も頷いた。

「そりゃそうだろ。オレのマジックショーなんだからな」

快斗は答えてから、小さな声で言った。

「それに、今回は相当、練習もしたしな」

青子はそうだったのかと呟いた。

今さらながら、マジックの練習に妬いていた自分が恥ずかしい。

あれは全部、自分のためだったのに。

その後も、パーティーは明るい雰囲気に進んだ。

もちろん、快斗のプレゼントの中身が、びっくり箱だったことをのぞいての話だが…。

The magic!! (後書き)

やきもちとのリクエストでしたが…うまく表現できず(T-T)

こんなusaですが、これからも皆さま、よろしくお願いいたします>(一一)<

感想・評価、リクエストお待ちしております(@^^)/

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3831x/>

夜空

2012年1月14日22時52分発行